

カレッジの歴史(3)

ロンドンのキングズ・カレッジ

池田良三

目次

まえがき

一、設立準備委員会の発足.....八一

公開書簡 準備委員会 建設資金の募集

準備委員会の事業 大学規則制定の構想

建設資金の調達 校舎建設 勅許状下付申請

二、勅許状.....八八

三、新評議員会の準備作業.....八九

校舎建設 教育課程 学長職員の任命

初代学長オッター

四、開学式.....九三

講義開始 授業料 キングズ・スクールの発展

高等部の改善 商学部の新設

キングズ・カレッジ準学士 医学部経営困難

五、カレッジの拡張時代.....九八

第二代学長ローズ 新勅許状 工学部開設

六、カレッジの繁栄時代.....一〇二

第四代学長ジェルフ 神学部の新設

軍人養成部の開設 夜間学部の新設

七、カレッジの転回時代.....一〇七

第五代学長ベアリー 大学財政の確立

夜間学部の充実

婦人学部の新設(女子高等教育の開拓者たち)

クイーンズ・カレッジ F・D・モリス

ベッドフォード・カレッジ ベアリー学長の努力

勅許状の改訂 学生数の増加

注.....一一九

あとがき.....一二〇

まえがき

世界中で最も裕福で人口も多いロンドンに、一八二八年まで大学がなかったということは、実に不思議なことであつた。しかし大学設立の動きがなかったのではない。

グreshamのカレッジ

金融業者、慈善家、王立取引所の創立者、サー・トーマス・グresham（一五一九―一七九）は、ロンドンの商人の子として生れ、カイウス・カレッジ（ケンブリッジ）卒業後、絹織物商組合員となり、またヘンリー八世（一五〇九―一四七）の代理人として活躍し、財産を築いた。彼はロンドンに帰つて後株式取引所を創設した。

彼は一五七九年没したが、彼はその遺言で彼の広大な邸宅と取引所からの収入全部を、ロンドン市と絹織物商組合に寄付した。その目的はここで中世の大学にならつて、修辞学、音楽、天文学、幾何、神学、医学、法律学の教授が行われるよう、七人の教授を提供することであつた。所が彼が残した財産には確実な管理人がいなかつた。そのため彼の計画は発展しなかつた。^(註1)講義は一五九七年開始され、一七六八年まで続けられたといふ。^(註2)

大学の機能は一八世紀の初め頃までは、単に教会に牧師をおくり、国家のために事務能力のある紳士をおくればよいと考えられていた。所が一八世紀の終り頃になると、工業の形態が変化し、商業は国際的

に拡大された。教育もこの社会的変化を正確にとらえる必要にせまられた。大学の概念は凡そ次のよう^(註3)に変化していった。

第一に、大学は世界的知識を提供する所で、限られた古典だけで精神的糧を提供する場所ではない。

第二に、大学は人種や信条に拘らず、あらゆる階級にその門戸を開放すべきである（従来イギリス国教会派の信者のみオックスフォードやケンブリッジに入学することが許されていた）。

第三に、大学は単に教会や立法府で働く人人のみの養成所ではなく、その他の方面で働く人々も育てるべきである。

最後に、今後の大学はその学費を低額におさえ、オックスフォードやケンブリッジのように高額であつてはならない。

「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の創立

一八二〇年代に入ると、大学は富裕な少数者の独占にまかせておいてよいのか、今や知識を広く多数の者に学ばせ優秀な人物を養成すべき時にきているのではないかという要求が強くなつてきた。ヨーロッパ中に吹き荒れたナポレオン戦争（一七九六―一八一五年）後、時代をさ、えるべき任務をもつ、いわゆる産業界の熟練工といわれる人達は、新しい技術を獲得し、新発明を動かす科学的原理、これらを根本から動かそうとする政治的野望、経済的・社会的問題等に、光を与え説明していく成人教育のための、高等教育機関の要求である。

このような要求に応じ、一八一七年ロンドンに「機械工業研究所」が設立され、また一八二三年ジョージ・パーベック（一七七六―一八四一）は「ロンドン機械工業研究所」を設立し、翌一八二四年には一、

三〇〇名の研究生がこの研究所の門をくぐり、正式に登録していたことは、前論文(宮崎女子短期大学研究紀要第6集、一四一九頁)で一部述べた所である。

新大学創立の要求は次の二つのグループから強く出されていた。

第一は、イギリス国教会派に属しない、非国教派の牧師たちである。(オックスフォードやケンブリッジの各カレッジでは、嚴重な宗教試験を実施し、イギリス国教会派以外の信仰をもつ者は入学させなかつた)。その中の代表的人物エドワード・アーヴィング(一七九二—一八三四、スコットランド出身、長老派教会の牧師)はエジンバラ大学に学び聖職位を受けた。一八二二年ロンドンの「カレドニアン・チャーチ」(スコットランド教会)の牧師に任命された。彼が開いた一派は彼の名をとつて「アーヴィンナイト」と呼ばれ、別名「カトリック使徒教会」とも呼ばれている。^(注3)F・A・コックスは有名な洗礼派の牧師である。洗礼派というのは、幼児の頃の無意識の洗礼に満足せず、成年になつてから信仰告白に伴なつて、全身を水に浸す洗礼を受けることによつて、はじめて真のキリスト教徒になり得ると主張する。この派に属する有名なロージャー・ウィリアムズ(一六〇四—一八三三)はロンドンに生れ、ケンブリッジのペンブローク・カレッジで聖職位を得て後、信仰の自由を求めてアメリカに渡つた。^(注4)

第二は、急進論者たちのグループである。J・ベンザム(一七四八—一八三二、哲学者、法学者)はロンドンに生れ、オックスフォードのクイーンズ・カレッジで学位を得て後、リンカーン法学院で法律を学んだ。行は一七八九年「道徳と法律の原理入門」を書き、この本の中で功利主義を「楽しみや幸福をうみだし、或は誤謬、苦痛、不幸を

さけようとする性質」と定義している。人間はこの二つの動機、即苦痛をさけ、樂しさを求めようとする、二つの動機に支配されている。それ故立法の目的は「最大多数の最大幸福でなくてはならぬ」といふ。

彼はこの原則から大学の設立を考へていた。^(注5)J・ミル(一七七三—一八三六、スコットランド出身の哲学者、経済学者)はその子のJ・S・ミル(一八〇六—一七三、哲学者)は共にこのグループの一員である。

新大学創立の原動力となつたのはT・キャンベル(一七七七一—一八四四)である。彼はグラスゴー大学の出身で、一八二〇年ボン大学(一八一八年創立)を訪れ、帰国後ロンドン大学設立について「タイムズ紙」に一文を草した(一八二五年二月九日付)。彼は新大学の構想を「われら中産階級の一五歳から三〇歳、或はもつと後までの青年に種々のことを教授し、試験を実施し、修練を積ませ、その結果に優等賞を与えようとする研究機関である。……このような大学の計画であります」^(注6)。

彼は騒ぎをおこすまいと考え宗教にはふれず、各種の科学、現代外国語(フランス語ドイツ語等)を広く採用する教育課程を考へていた。彼の訴えに対し熱心な支持者が増加した。J・ミルその他の有力者が会合し、実施計画が練られた。直ちに建設資金の募集にかゝつた。一株一〇〇ポンドとして売りだした。六か月間に一一万ポンド集つた。大学の敷地はゴウワー街に確保された。第一代学長には英国学士院会員L・ホーナーが任命され、一八二八年一〇月、三〇〇名の学生を入学させ、ここに「どの神学とも関係のない」ユニバーシティ・オブ・ロンドン」が創立された。学生数は翌年二月には五五七名となつた。

しかし、新大学は法律上はまだ「株式会社」に過ぎない。株式会社

であれば、重要事項は株主総会に提出し、総会の意志通り動かねばならない。それでは大学としての機能は果せない。学位授与権を含む大学創設のための「勅許状」が許可されるよう申請しているが、「**大学は神の存在を否定している**」^(注)という理由でまだ許可されていない。これはイギリスの世論をわきたたせる大論争となった。無神論の大学に賛成するタイムズ紙、モーニング・クロニクル紙等。これに反対し、教育は宗教の基礎の上に築かるべきものとするスタンダード紙、モーニング・ポスト紙等である。

さて、この大問題、即既に出発している無認可の「ユニバージティ・オブ・ロンドン」を何とかして救済し、イギリス国民の幸福を一層高める方法として、どんなことが考えられるか。この問題を解決する目的で、次に創立されたのが「キングズ・カレッジ」である。

一、設立準備委員会の発足

キングズ・カレッジ創立の第一の功労者はジョージ・ドゥーイリー博士である。後年彼は病を得て一八四六年二月没したが、この直後のカレッジ評議員会で、故ドゥイリー博士の功績を記念するため、礼拝堂内に大理石の記念碑を建設することが決議された。その理由は彼が新大学の建設を説いて人々を動かし、設立準備委員会が発足して後は最も熱心な委員、活動家として推進に当り、施設の設計、学長の選任等の際も、その中心人物であったからである。この石碑は現在礼拝堂の外側の壁にはめこまれている。ドゥイリー博士の胸像は図書館内に飾られている。

ジョージ・ドゥイリー博士（一七七八—一八四六）
彼はルイス（東サセックスの首都）の聖堂事務局長の子として生れた。彼はコープス・クリステイ・カレッジ（ケンブリッジ）に進み、一八〇〇年優秀学生として卒業し、翌年特別研究員となり、聖職位を受けた。

それから三年間父のもとで牧師補をつとめ、その後ケンブリッジ大学に帰り、講師、試験官、数学試験の監督官、説教者として一〇年間つとめた。

一八一三年、カンタベリー大僧正マナーズサットン博士から聖堂付牧師に任命され、次に大僧正を補佐する顧問となった。一八二〇年はラムベス（ロンドン南部の自治区、現在人口二万人）教会の主任牧師に任命された。それから凡そ二〇年、即一八四二年ピール首相（一七八八—一八五〇、首相一八三四—五、一八四一—六）からピーターバラの本寺長（聖堂のある僧会の長）に任命される迄、ラムベスで活動した。彼の主任牧師としての活動は実に目覚ましかった。

彼がラムベスに着任した頃、教区内の人口は凡そ五万四千人であった。一八四六年には二倍半の一三万人となっていた。彼はこの多数の人々の信仰生活を支えるため、教会の新設に粉骨の努力をした。彼は教区内に一三の新しい教会を設けることに成功したのである。その上彼はキリスト教知識普及協会（一六九八年結成、貧乏で学校へ行けない子どもたちのために健全で宗教心を養う学校を建設すること）と、福音主義普及協会（前者と殆んど同じ頃結成されている）の活動的な会員であった。ドゥイリーはマンツ氏と共同で、あの内容の充実した「聖書評釈」を編集していた。彼はまた当時拡がっていた非宗派主義

俗人主義の矯正者としてキリスト教知識普及協会を支持しているジェームズ・ローズ氏（将来第二代学長となる人）、イギリス高教会派（教会の權威や支配及び儀式を重んずる一派、カトリック教会に近い）の人々とも緊密な關係にあつた。

以上のような人物であるドイリー博士が新大学創立の提案者となつた。

公開書簡

キングズ・カレッジ創立の第一歩となつたのは、ドイリー博士が一八二八年「キリスト教信者」という匿名で発表した、ロバート・ピール内務大臣宛の公開書簡「ロンドン・ユニバーシティ問題について」の印刷物である。

ピールは一八二八年一月ウェリントン公（一七六九—一八五二、英國の將軍、政治家、ウォータローでナポレオン一世の大軍を破つた）の内閣の閣僚として返り咲いていた。彼は教育の根底に宗教がなくてはならぬことを極力主張していた一人である。ドイリー博士がピールに訴えた要点は次の通りである。

第一に、イギリス国内には大学が不足している。その理由は、(1)人口が増加している (2) 富裕な中産階級が増加している (3) 知的改善をはかろうとする意欲が人々の間にひろがってきている。

第二に、さきに設立された「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」はこの要望をいくらか満たしている。しかしこの大学が首都の青年に与えている学問的利益も、その教育課程の中にキリスト教徒教育に関する課程を全然もっていないことからくる精神的欠陥というより、その

害毒を比較すれば、この害の方がはるかに大きい。

第三に、彼は大学における宗教的知識の地位について述べ、大学から宗教を追放することは、道徳的に有害で、精神的にも毒となる。神学は外の教科、即倫理学と密接な關係にあるので、神学の根拠なしに、それらの教科を教えることは不可能である。

最後に書簡は、実際のプログラム、即(1)オックスフォードとケンブリッジの両大学を拡張すること、(2)北部イギリスに新大学を創立すること、(3)ロンドンに第2の大学を設立し、この大学では青年の心にキリスト教の原理をしみこませるような教育が中心にすえられ、この国内に苦心の未形成された健全な形の宗教が、教育の中心を占めるべきである、と述べている。^(注8)

ドイリー博士の書簡は単に風向きをさぐる風としての役目のものではなかつた。各方面からの支持があるという確信のもとに書かれたものである。彼は最後に設立が予想されるカレッジについて、「宗教と学問に深い愛情を持っておられるジョージ六世王（一八二〇—三〇在位）は、新大学の慈悲深い保護者となつてもよい意向を示され、王の名を冠してもよいというご意向があるとも推察され、また敷地の一部を提供してもよいと考えておられるように拝察される」と結んで^(注9)いる。

ドイリー博士の書簡は早速二つの成果をあげた。その一つはゴーストリートの新大学（ユニバーシティ・オブ・ロンドン）に、一八二七—八年度中にイギリス国教会に属する三名の牧師が重要な職員として任命された。即英語教師、古典教師、物理学教師の三名である。たとえ大学は宗教教育を実施していなくても、三名の教授の感化は大きいといわねばならぬ。彼等は福音主義者の支援のもとに、一八

二九年大学の近くに礼拝堂を買い求め、神学研究の施設とした。このことは合理主義者たちからは快く思われなかったのは当然のことである。第二は、一八二八年の夏、イギリス流の基礎の上に立つ、即教会と国家の主張が調和した、キングズ・カレッジ創立の計画が進行しはじめたことである。

ドーイリー博士がラムベスでなした事業の成果は、カンタベリー大僧正の心をとらえた。また新大学創立へのドーイリーの熱心さも大僧正を動かした。大僧正の支持は実に貴重で、その効果は決定的である。第三ルツランド公（アン女王の孫にあたる）の孫である大僧正マナーズサットン博士は、イギリス最後の王室出身の最高僧である。大僧正は王室に近い上に、貴族階級や政界にも広く顔がきいている。

ピールと大僧正はまず新大学の構想についてウエリントン首相を説得し、次に有力閣僚を説得した。創立計画樹立の根まわしが終り、一八二八年六月初旬設立計画が発表された。その中で新設大学の原則となる主張を述べ、来る六月二一日正午、ウエストミンスターにあるフリーメイソン・ホールで開催される公開の設立総会に参加され、ご援助賜わるよう、その会合では公爵が座長となり、大僧正は全員（カンタベリー、ヨーク、アイルランドの三名）そろい、高僧・貴族の多数の集会となる予定である、と報せられた。報道機関の受取り方も順調であった。王権派に属する新聞は首都にキリスト教主義の大学が創立されることに歓呼して迎えてくれた。

準備委員会（一八二八年六月二一日）

フリーメイソン・ホールの初会合は大成成功であった。スタンダード

紙は次のように報道した。ウエリントン公は三人の大僧正、七人の僧正、多数の貴族を伴い、自ら議長席につかれた。貴族の中にはピールとアバディーンの二名もいる。二名とも後の総理大臣となった人で、彼等は高額の寄付を申し出ていた。この外に多数の熱心な牧師たちがいた。

公は最初に今日の会合の趣旨について述べられた。わが国は本来プロテスタントの国であつて、われらの祖先の手でイギリス国教会が設立されている。それ故イギリス国教会の教義が国民教育の基礎となるべきである。もし教育の中から宗教教育が締めだされたならば、それは宗教教育が無用であるとする考え方以上に、害毒を流すものと思われる。ロンドンにカレッジを創立するについては、教会の首脳部は有用な科学と文学の教授と、イギリス国教会の教義と礼拝式とが、うまく結びつくような教育を望んでおられる、と述べ、さらに次の重要事項を提案された。

1、首都に一般教養のための大学を創立すべきことは本日の会合の結論である。この大学で文学と科学の各分野が教授の対象となることは勿論であるが、青年の心の中にキリスト教の教義と礼拝式を教えこむこともその本領とすべきである。

2、国王はこの大学の設立を喜び、その保護に努力され、その名称も「ロンドンのキングズ・カレッジ」とすることを予定されている。

3、新大学が創立されるに当り、新大学の教育課程について、さらに運営機関、管理機関の輪郭が決定された。

次に準備委員会を構成する委員二七名が指名され、この委員会で以

上の決議事項を実施するために必要な段階をふみ、次の会合のため必要な細案が実行されるべきことが決定された。事務局長は委員の一人ヘンリー・コレリッジ氏と決定した。

建設資金の募集

建設資金の募集には二つの方法がとられた。第一は、有志の寄付金である。第二は、一〇〇ポンドの株券（利息は四％をこえないものとする）の販売である。この二つの方法で募金し、その総額が一〇万ポンドに達するまで事業に着手しないことが決定された。寄付金と株券の申込み、第一回分は先の集会の終りに発表されたが、既に二万ポンドに達していた。四日後には二四二名（内牧師が八八名）が申込み、三〇、七九四ポンド（寄付金二〇、〇九四ポンド、株券一〇七）となった。

この会合で宗教試験について疑問がわき、誰が新大学に入学を許されるのかという質問が出された。これはイギリス国教会派の信者以外の人々にとつては重大なことであった。この疑問に対しプロムフィールド僧正から力強い否定の声がかかり、僧正の陳述は高い拍手を受けた。全員感激し、満足して散会した。

さて、社会の反応はどうであったか。「ジョン・ブル」紙（一八二八年六月三〇日付）は、キングズ・カレッジ創立計画樹立に狂喜する態度に必ずしも同調する者ではないがといひながら、ゴッワー・ストリート¹の不信の徒に一撃を与える、キングズ・カレッジの設立に賛成であるとし、国民多数の義憤が遂に燃えあがり、信仰をもたない不信のやからからの悪影響から、神の祭壇と王位を守るために、多数の人々

が再び集つてきたと賛意を表している。このような主張が生れるには理由がある。

当時神学上の主張が高まつていた。ジョン・ブル紙——この新聞は日曜週刊紙である——極端な王権主義と極端なプロテスタントの主張をもっている。当時二面の敵を相手に苦闘していた。その一つは哲學的合理主義者と非国教徒で、彼等はイギリス全土に俗人主義の教育を普及させようとしていた。もう一つはカトリック派に対する抵抗である。彼等は昔の宗教的権力を取り戻そうとしていた。それ故キングズ・カレッジの創立に賛成したのには二つの根拠があつた。一つはそれがゴッワー・ストリート流の不信仰者集団に反対する、キリスト教の施設だからである。第二は、プロテスタント国におけるプロテスタント主義の施設だからである。

準備委員会の中の、以上の二つが同居していた。一つはキリスト教徒で、これは不信論者に反対する集団である。もう一つはプロテスタントで、これはカトリック教派に反対する集団である。

さて、キリスト教の施設であるという点までは問題はないにしてもカトリック教徒に反対するプロテスタントを表面に出すことになれば「高教会派」^{ハイ・チャーチ}（教会の権威や支配及び儀式を重んずるイギリス国教会の一派）に属する人々の反発をかうことは当然である。この高教会派に属する人々を中心となつて、「オックスフォード運動」（一八世紀の終りから一九世紀にかけて、イギリス国教会の牧師たちは保守的な政府の保護のもとにねむっていた。このような時代に、オックスフォード大学を中心に宗教改革運動がおこつた。この運動をいう）がおこつた。この運動は一八三三年、キープル（一七九二—一八六六）が「全国民

あげて背信す」の演題で講演し、これをきっかけに同大学のニューマ
ン（一八〇一—九〇）・ピュージー（一八〇〇—八一）等が中心となっ
ていたことは、広く知られている通りである。

この時代はまた内外ともに複雑で多様な活動が行なわれていた。イ
ギリス社会の転換期であった。

一八二九年、カトリック教徒解放法案通過（宗教改革以来カトリッ
ク教徒は一切の公の活動を禁止され、学校や大学入学を禁止されてい
た）

一八三二年、第一次選挙法改正法案通過（ヘンリー五世時代の一四
三〇年選挙権を制限する法律が通過し、下院議員の選挙権は一年四〇
シリング以上の土地収益ある自由土地保有者、即ヨーマンに限定され
ていた、それ以後四百年目の改正）^(注10)

一八三三年、英帝国内の奴隷廃止

全、一般工場法の公布（最初の工場法は一八〇二年制定されている
が、子どもに関しては、徒弟の労働時間は食事時間を別にして、一日
一二時間以上働かしてはならぬ、また午後九時以後翌日の午前六時ま
での間の、いわゆる深夜業に従事させてはならぬと禁止している）

以上のような時代であつたればこそ、時代の方向を指示する指導理
念を確立しておきたい意向が強かつたと思われる。所が大僧正マナー
ズ・サットン博士は記念すべき会合の一ヶ月後（七月二一日）に没し
た。彼は創立基金として一、〇〇〇ポンド遺贈した。そこでカンタベ
リー大僧正にはロンドン僧正W・ホーレー博士が、ロンドン僧正には
チェスター僧正C・ブロムフィールド博士が任命された。^(注11)

準備委員会の事業

準備委員会（委員二七名）は開催に必要な準備作業を精力的にす
めた。勅許状は一八二九年八月発行され、その後は勅許状で指名され
て構成される評議員会に準備委員会の権限が委譲されることになるが、
それまでの凡そ二ヶ月間に準備委員会は三四回開催されている。先
に述べたドレイリー博士はこの委員会に三一回出席し、内一回は議長
をつとめている。彼は財政委員会、建設委員会の委員として活動し、
事業推進の原動力であつた。次に熱心であつたのはW・ホーレー博士
（後のカンタベリー大僧正）であつた。彼はロンドン僧正一八一三年
から一五年間、カンタベリー大僧正を一八二八年から二〇年間も勤め
た、イギリス随一の高僧である。多忙な僧正は二九回出席し、毎回議
長をつとめ、委員会を主催した。彼は真の学者、神学者であつた。彼
は冷静な判断力と平常心の持主であつた。優秀な事業家であつたが、
彼の説教は印象的とはいえなかつた。彼の政治的立場は「絶対王権派」^(注12)
であつた。

大学規則制定の構想

新大学の準備のための規則は、準備委員会の素案として一八二八年
七月一日提出された。その中の二ヶ所が修正された。

第一は、カレッジの宗教的基礎にかゝる重大な問題点である。ど
んな学生に入学資格を与えるか、どんな宗教試験、どんな宗教的義務
が課されるべきか。これは緊急な問題であつた。この件については先に
述べたように、ブロムフィールド僧正が速座に発した適切な返答で一応
けりがついていた。その時の質問者はクエーカー教徒の一員であつた。^(注13)

この件については充分討論され、どの信仰箇条を採用するか、もはや論議すべきではない。準備委員会は次のように決定した。カレッジの全学生は本学の評議員会が決定した宗教教授の課程に出席する、カレッジ内の礼拝堂行事に出席するよう要求される（毎日礼拝堂行事に出席し、毎週一回神学の講義を受ける義務がある）。

第二は、臨時学生 (Occasional students) で、彼等は以上の要求から解放されている。彼等はユダヤ人、トルコ人、無神論者、その他の宗派心の強い人たちである（いいかえれば自由主義者は成功したことになる。キングズ・カレッジに入学することは、自由にロンドン大学に入学するのと同様に、自由であることを意味している）。

準備委員会は一二月三〇日の会合で補足規定を追加した。重要な三点は、

- 1、カレッジの学長はオックスフォード、ケンブリッジ、或はダブリン大学の、少くとも文学修士 (M・A) の学位をもち、聖職位保持者であること。
- 2、当カレッジの教授はイギリス国教会の会員であること、但し東方文学の教師、現代外国語 (フランス語ドイツ語等) の教師はこの限りではない。
- 3、カレッジは二つの部門にわけける。一つは一六歳以上の学生のいる高等部とし、他の一つは中等部で若い生徒のための通学制の学校 (準備学校) とする。

建設資金の調達

準備委員会が直面する第二の問題は資金の件である。同委員会は資

金が一〇万ポンドに達して後具体的に着手することとし、募金に努力した。第一回準備委員会までに二万ポンドの寄付予約があった。

同年七月一七日ロンドン市長招集の高官の集會が王立取引所で行なわれた。この会合でカレッジが設立されること、寄付金を集めるために二一名の特別委員会を組織することが決定した。僧正と牧師の別の集會も催された。地方都市委員会はリボン、リバープール、ノーウィチ、ヨーク、ロチェスター等に結成された。一八二八年事務局長は

七月八日 五九、八八三ポンド

七月二日 六八、八三九

七月二四日 七七、〇〇〇

八月一九日一二〇、〇〇〇

に達したと発表した。次に第二の目標一〇万ポンドが設定された。

建設費は一八二九年五月までに一七万ポンドとなり、内支払った金額は一二六、九七四ポンドであった。

敷地は寄付者の会合 (一八二九、五、一六) で、ストランド街 (ロンドン・シティとウエストミンスター間のチームズ河岸の通り) のソマセット・ハウス (ソマセット公爵が一五四七年処刑された後王室の用地となっていた) と決定し、その代金は一七、〇〇〇ポンドと見積もられていた。

校舎建設

校舎建設構想の最終案が決定されたのは一八二九年四月であった。

その中には次のような施設が考えられていた。(1) 礼拝堂 (2) 二、〇〇〇名の学生を収容できる一〇の講義室 (3) 教授専用の二八室 (4) 中等

部四〇〇名の生徒用教室 (5) 講堂 (6) 学長住宅 (7) 博物館その他の建物等。以上を完成させるには凡そ一五万ポンド要すると計算されていた。委員会は当面の計画として、(1) 礼拝堂 (2) 講義室6 (一四〇〇名の学生用) (3) 教授専用室一八 (4) 教室 (少年用のもの) (講堂学長住宅博物館等は第二期工事として延期する) 建築費概算一一五、〇〇〇ポンドである。

勅許状の下付申請

準備委員会は校地の決定、校舎建設に多忙を極めたが、もう一つの大事業は「勅許状」の下付申請である。勅許状がないとすればこの施設は商法の原則を適用する有限会社の一種に過ぎないことになる。この施設の管理は寄付者と株主の総会の決定に従わねばならぬことになる。

勅許状を得ることができれば、管理権のある法人団体となって独自の人格をもち、財産を永久に保有し、又は処分することができるし、この施設の運営についての諸方針を規則として制定することができる。

勅許状のないユニバージティ・オブ・ロンドン

一八二五年五月、勅許状発行のための法案が下院に上程された。しかし誰からも見向きもされず、従つて廃案となつた。五年後、再び勅許状下付の請願書が国王に提出された。今回はオックスフォード、ケンブリッジの両大学から猛烈な反対があつて、成功しなかつた。ゴードン・ストリートの新大学に対する反対の主な理由は、カレッジではなく、ユニバージティという名称に対するものであつた(カレッジは

教師の団体、このカレッジの連合体がユニバージティである)。

当時カレッジとユニバージティの区別は明瞭でなかつた。多くの人がこの言葉の上に迷いがあつた。法律家たちは二つの施設についてちがつたものと事務的な考え方をもつていた。即ユニバージティという場合は、学位を与える権限をもつ教育的施設である。カレッジは学生のための教育施設であるが、学位授与権はない、という解釈である。議会内のイギリス国教会派の人々や、オックスフォード、ケンブリッジの牧師たちが、ゴードン・ストリートのカレッジに与えまいとしたのは、この学位授与権である。キングズ・カレッジも、最初は容易に勅許状を獲得するために、学位を授与できる総合大学の創立をねらっているのではないと公言していた。

キングズ・カレッジの創立に王室、聖職者、イギリス国教会から特別な援助を受けていたことは疑う余地はない。それ故キングズ・カレッジの競争者は共和主義者、急進主義者、国教反対者たちであつた。

内務大臣からロンドン僧正ホールレー博士宛に一八二八年八月一日連絡があつた。政府はキングズ・カレッジに対し法人団体たることを許可する勅許状を発行することを決定していると。一日後また連絡があつた。カレッジの組織とその機関の詳細を知りたい、と。

一〇週間ほど経た一〇月二一日、事務弁護士マークランド氏(彼は準備委員会から指名されている。事務弁護士は法廷弁護士(バリスター)を手伝っている)は勅許状の草案を用意するよう命ぜられた。彼の草案は一月一八日、二月六日、三〇日、明けて一八二九年一月二三日、一九日の五回にわたる会合で、熟考され、修正され、さらに再考され、再修正され、最後の会合で決定された。

ロンドン僧正はカンタベリー大僧正の承認を求めするために、送付すべき政府の要人の名簿と、新カレッジの評議員と職員^の推薦状を添え、勅許状の草案を大僧正のもとに送った。書類は一八二九年二月三日内務省におくられた。政府がいつ決定したかわかっていないが、勅許状はその年の八月一日国王が裁可され、直ちに発送された。準備委員会は八月二五日最後の形ばかりの会合を開き、最後の仕事として、その機能を新しく構成された、新カレッジの評議員会に移した。

二、勅許状

一八二九年の勅許状は五八条からなっているが、次の一〇条にまとめることができる（この勅許状で一八八二年まで管理されること、な^つた。

1、前文

カンタベリー大僧正、ロンドン僧正たちが、健全な宗教と有用な学問との結合をいつまでも維持したいという請願に対し、ジョージ四世は、ロンドンのキングズ・カレッジへの勅許状を発行することに同意した。

2、永久的な管理委員会

九名の公吏（聖職者四名、俗人五名）はその職務上新設カレッジの終身管理委員たるべし（ヨーク大僧正、ロンドン僧正、セント・ポールズ本寺長、ウエストミンスター本寺長の四名、俗人としては大法官、最高裁判所長官、内務大臣、下院議長及びロンドン市長の五名）。

3、法人団体

法人団体は前に述べた九人の管理委員とキングズ・カレッジの株主で構成されるべきである。株主とはカレッジの一〇〇ポンド株の株主と、五〇ポンド以上の寄付者をいう。

以上のように組織された法人団体は永久に継承され、またカレッジの紋章入りの印章（Common seal）の使用が許可される。

4、教育課程

カレッジで教える教科は、(1)文学と科学のあらゆる分科 (2)キリスト教の教義と礼拝行事

5、カレッジの訪問者

カンタベリー大僧正はこのカレッジの訪問者とする。彼は本来訪問者に属するすべての權威をもつものとする。（「訪問者^{ワイジター}」とは、大学、カレッジ、学校或は同様の施設に対し、監督する権利又は義務をもつ者をいう―オックスフォード辞典による）。

6、終身管理委員

さきに述べた九名の終身委員と株主委員の外に、新たに八名の新委員を加える。彼等が欠員となった場合はカンタベリー大僧正が俗人の中から選り補充するものとする。最初の委員名は次の通りである（ルツランド公、ノーザンバーランド公、外略）。

7、評議員会

このカレッジの活動的な管理機関で、その構成員は (1)一七名の管理委員（永久委員と終身委員） (2)カレッジの出納員 (3)法人団体の二四名の会員（この会員名は勅許状に記されている。二四名のうち一七名は準備委員会の旧委員、他の七名は法学院の教授

クリストファ・ベンソン、外略。二四名のうち六名は毎年引退するものとする。その補充は法人団体の総会で、構成員の中から選出する。評議員会の権限は必要があれば学長、教授、講師、校長（年少部の）を任命し、罷免する任務をもっている。

8、年次総会

毎年一月三一日から四月三〇日の間に、カレッジの法人団体一般総会が開催される。この総会では (1) 欠員となつた評議員の選出 (2) カレッジの出納員と三人の会計監査役の指名 (3) 前年度中の評議員会の議事の報告と会計監査の報告を聞く。

9、議事録の保管、その他について

10、株券と寄付金について

以上の勅許状にはいくつかの問題点が残されている。

第一に、法人団体たるこのカレッジは、総会と評議員会という二つの機関で運営される機関である。

第二に、キングズ・カレッジがゴードン・ストリートのカレッジとちがう点は (1) 聖職者たる訪問者がいること (2) 一七名の委員をもっていること (3) 学長、教授、講師、校長の地位が不安定である。彼等は管理面に関係せず、教育課程の決定にも関係していない。また評議員会の決定でいつでも解雇され、異議の申し立てもできない。ただ学長と校長のみに拒否権が与えられていた。

第四に、勅許状の草案が考えられている頃（一八二八年秋）、カレッジの校地はさまっていなかった。ロンドン北西部のリーゼント・パークが予想されていた。この環境であれば校地内に寮の建設が可能となる。一八二八年二月三〇日の準備委員会では、学長が学内に住み、

個人指導教師となる一群の教授が、学内の寮に居住することも可能と考えられていた。

第五に、重要な案件が残されている。特に(1)カレッジの全職員はイギリス国教会派の信者であること、カレッジ内ではイギリス国教会の教義と礼拝堂における礼拝行事が実施されるということ。(2)学部へ入学準備のための準備学校（中等学校）の設立については勅許状に何も述べられていない。しかし職員名簿の中には中等学校の教師、それらの教師たちの校長という名称がはつきり記されている。

三、新評議員会の準備作業

勅許状で新たに構成された評議員会は、カレッジが開学するまでの二年間（一八二九、八、四—一八三一、一〇、八）、開学のための準備作業を精力的にすゝめた。この間二六回の会合をもち、活動的な委員は準備委員会の際と同じメンバーであった。この委員会の運営上例外規定が作成された。それはホーレー大僧正についてである。大僧正は今回は「カレッジの訪問者」となられ、委員会にはその席がない。準備委員会では三四回の委員会に二九回も出席され、議長となつた人物である。彼の知識と経験をこの新しい委員会の席で聞くことが出来なことは大変な損失である。そこで第八回の会合（一八三〇、三、二二）で、今後この委員会の議事録の写しは全部大僧正のもとに送らるべきこと、必要があれば大僧正にこの委員会への出席を求めることが可能であると決定された。この決定に従い大僧正は一八三〇年四月から翌年一〇月までの間に八回委員会に出席され、貴重な意見を述べら

れている。

新たな議長ヨーク大僧正は常に欠席で、ロンドン僧正が代行され、ドイリー博士はいつもロンドン僧正の片腕として活動していた。

評議員会の最初の仕事はカレッジの人事である。秘書H・W・スミス、事務弁護士マークランド、建築士ロバートを任命した。

次に当面の仕事进行处理するため、四つの委員会を組織した。建設委員会、財政委員会、教育委員会、及びカレッジ運営のための細則制定委員会である。

当面の仕事とは (1)校舎建設の促進 (2)資金の積立 (3)教育課程の決定 (4)細則の制定 (5)学長、教授の選任 (6)カレッジ各部門の準備 (7)学生の入学許可 (8)開学式(一八三一、一〇、八の予定)開催のための諸準備である。

1、校舎建設

第一回評議員会(一八二九、八、二五)で校舎建設費六三、九四七ポンド支出が決定した。付属建物まで含めて八万ポンドの契約である。

解剖学の映写室と解剖教室、四つの講義室(一、一〇〇名の学生収容可能)、化学実験室2、博物館2、図書館2、三〇〇名から三五〇名を収容できる準備学校で使用する教室、礼拝堂

2、資金

一八三二年八月、入金一一三、五九八ポンド

3、規則

準備委員会は新カレッジの宗教的原則について既に決定していた(一八二八、一一、三〇)。このカレッジには一六歳以上の学生の

ための高等部(本来は居住制である)と、それ以下の生徒のための下学年部(通学制である)がある。

教育課程については新しい評議員会の手に残されていた。教育に関する委員会では次のような計画を評議員会に提示した。

一般的学習課程

(一)高等部

- (1)キングズ・カレッジの一般教育課程は宗教と道徳、古典、文学、数学、物理学、化学、博物学、論理学、英文学と作文、商業科、歴史、この外現代外国語や医学、外科学、法学等である。(2)略
- (3)どの試験でもイギリス国教会の教義及び礼拝堂行事は必修とする。
- (4)高等部に入学が許可される年齢は一六歳である。
- (5)一日の課業は礼拝堂のお祈りに始まる。学生は全員出席せねばならない。遠い所に住んでいる学生は学長の許可を得た上で、日曜日その家族と共に近くの教会の礼拝に参加することが許される。しかし学長が求める場合はいつでもカレッジの礼拝堂の礼拝行事に出席せねばならない。(6)略
- (7)学生をその住宅内に住まわせることを許可する教授又は教師に、評議員会は同意を与える。そのような寮の管理についての規則は近く制定される予定である。

(二)下学年部

- (8)下学年部には通学生を入学させる。ここでは高等部への入学準備の教育を施すものとする。ここは別に任命する校長と助教師のもの

とで運営されるものとする。教育課程は宗教、古典、数学、英文学と作文、現代外国語とする。

(9) 下学年部で与える賞は公開試験によるものとする。

4、学校細則

委員会は勅許状で許可された学校細則の制定をすゝめた。法律家を中心に原案が作成された。一八二九年二月一日草案が示された。彼等が取扱った諸点は、委員会の開催、出納事務、カレッジの紋章・印の保管、記録の作成、寄付金・出資金の取扱い事務等についてである。^(註15)

学長、職員の任命

初代学長W・オッター(一八三一—一八三六在職)

新カレッジの初代学長として誰を選ぶか、これは最も重要な事項である。準備委員会は一八二八年一二月の委員会、学長の条件として次のような取決めをしている。

- 1、学長はカレッジの全般的管理者である
 - 2、学長はカレッジの全教育課程の指導者、監督者である
 - 3、学長は聖職位をもち、オックスフォード、ケンブリッジ又はダブリン大学の卒業生で、文学修士の学位の保持者である
 - 4、学長は学位試験を主宰し、カレッジの礼拝堂で説教し、カレッジの状況に必要な応じ評議員会と管理委員会に報告する
- 等であつて、この件についてはその後勅許状でも、カレッジ規則又はカレッジ細則にも、何らの取決めもない。

次に学長についての記録は、教育課程委員会が一八三〇年四月次のように記している。学長は、カレッジの一般的監督の外に、学生の宗教的・道徳的教授という特別な任務を持つ学者であること、報酬は年八〇ポンドとすること、し、以上のような資質と条件を持つ学長候補者を内密に調査すべきであると述べている。

学長探しが実際どのように進められていたのか、公式の報告はない。しかし非公式の報告によると、最初J・ロンスデールに白羽の矢が立てられたということである。しかし彼は辞退している(彼は九年後第三代学長に就任し五年間勤務している。その後リッチフィールド僧正となつている。^(註16)「リッチフィールド僧正、ジョン・ロンスデールの生涯」による)。

その後交渉は難航し、漸く一四か月後の一八三二年六月評議員会は、W・オッターが学長並びに神学教授に任命されたと発表した。

W・オッター学長は一七六八年生れ、ケンブリッジ大学にすゝみ、一七九〇年学位を受けて後、五年間グラマー・スクール校長をつとめ、その後母校のジーサス・カレッジの特別研究員となり指導教授となつた。一八〇四年教会付牧師となつて転出し、この間にG・ドゥーイリー博士(前出、キングズ・カレッジ創立の主唱者)と親しくなつた(ドゥーイリー博士はオッターの妻の妹と結婚している)。

彼は学者であり、紳士であつた。彼は敵意を抱く人の心をやわらげ、敵対者を親密にし、平和を推進する不思議な能力の持主であつた。彼のもつ親和力は「王党派」よりも「議会議院」^(註17)に接近し易かつた。キングズ・カレッジは王党派に接近し過ぎていた。

彼は「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」を推進している「ベンザ

ム派」(ベンザム「一七四八一—一八三二」)のとなえる功利主義者の一派)とも近かった(彼の娘は社会改革家と結婚し、他の一人は自由貿易商と結婚している)。

宗教観においても彼は「高教会派」^{ハイ・チャーチ}を静める立場にいた。彼はいつも正統派の立場にいた。福音主義者の態度をとるにしても、或はオックスフォード運動派に属する人々(一八三三—一八三四年の間オックスフォード大学のニューマン教授等が初代キリスト教とカトリック的教義を鼓吹した宗教運動をいう、これに近い考え方の人々を高教会派という)の禁欲的態度をとるにしても、決して狂信的とはならなかった。キングズ・カレッジの出發に当り、教会のどの階層とも適切な間隔をもって処していく上で、彼ほどその地位に適した人はなかった。

しかし何といつても彼の興味の中心は教育にあった。グラマー・スクール校長の五年間、次にケンブリッジ大学では個人指導教師としての八年間、教区教会の牧師時代も常に教区内の学校の諸問題に注意を払っていた。

その他の職員

次に古典、数学、英文学と歴史の三教授が任命された。彼等の報酬は学生の月謝収入から支払われるが、その報酬は最低二〇〇ポンドをくだる金額を支払うべきではない、と決定した。次に化学、物理学、博物、法律学、解剖学と生理学、医学、外科学、商業の八教授が任命された。医学部教授の任命に評議員会は慎重であった。評議員会の委員の中に第一級といわれる医師が三人もいたからである。彼等は外科学教授にJ・H・グリーンを、解剖学と生理学教授にH・メーヨーを

推薦した。

J・H・グリーン(一七九一—一八六三)

彼は聖トーマス病院の有名な外科医で、またバラ医学校の講師であった。また広い一般教養の持主であった。彼は英国学士院の会員で、解剖学の大家であった。哲学者としても有名であった。彼はベルリンでカント哲学を学び、イギリスの功利主義哲学に対し、ドイツ理想主義哲学の戦士として帰国した。こうして彼はS・T・コレリッジ(一七七二—一八三四、イギリスを代表する詩人、批評家)と親しくなり、意気投合する友人となった。キングズ・カレッジ内のグリーンの影響は、単に医学校という枠をこえて、大きかった。

H・メーヨー(一七九六—一八五二)

彼はミドルセックス病院に勤める外科医であった。彼は極めて有能な解剖学者で、また外科手術の名手であった。しかし、教師としても同様であるとはいえなかった。彼は解剖学の外、生理学と病理学を教えねばならず、それ故彼は人体に関する理論的實際的の全分野について教えねばならなかった。

評議員会は月謝が入ってくる前に、多額の金額の要望を受けた。メーヨー教授からの要望は最も緊急でその上高額であった。彼は一八三〇年一〇月九〇〇ポンド要望した。内訳は解剖用の博物館に二五〇ポンド、解剖用具と標本代三五〇ポンド、解剖教室助手のため三〇〇ポンドである。評議員会は金額を可決した。化学教室、植物学教室からもそれぞれ要望が出された。^(おぼ)

四、開学式

三年間の苦勞が実を結び、一八三二年一〇月八日、キングズ・カレッジはその正門を社会に向つて開いた。しかしその門出は吉兆続きとははいえなかつた。天候は今にも泣きだしそうで、黒い雲がロンドンとウエストミンスター・ホール（議事堂）をおおつていた。

その上悪いことは、前日（一〇月七日金曜日）は選挙法改正法案が上院に上程され、その運命が決定される日であつた。議会では終夜激論がたたかわされ、この開学式の朝の六時、上院は四一票の多数で否決しきつた。この四一票の中には僧正二一名がいた。僧正たちが結束して反対しなかつたならば、この改正案はこの日法律となつていたであらう（この法案は翌一八三二年成立している）。この法案を逆転否決させたのは大僧正の演説であつた。この瞬間から王国内で僧正たちの人気は一挙に下降した。この僧正たちこそキングズ・カレッジの創立者、協力者、管理者である。彼等は暫くの間戸外で生命の危険にさらされていた。プリストル僧正邸は暴徒のたち焼き打ちされた。

コープルストン僧正はその日記に開学式を次のように記している。この朝六時頃、議会で選挙法改正法案が採決された。私はこの法案が修正のため委員会に付托されると考へていた。所が否決された。私は意気消沈したまゝ、七時に床についた。しかし、九時には起きた。一二時にキングズ・カレッジの開学式に出席し、それは四時まで続いた。

カンタベリー大僧正が主宰する開学式は、一時半ロンドン僧正の説教にはじまり、その後オッター学長の講義が続いた。僧正の説教は後

に印刷され發表されたが、力強いものであつた。ロンドン僧正プロムフィールド博士は、最初コリント書「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語つても、もし愛がなければ、やかましい鐘や騒がしいシンバルと同じである」を読み、宗教と教育の關係に説き及び、この問題の解決がユニバージティ・オブ・ロンドン創立の最大の目的である、と述べ、さらに次の三つのことを主張した。

第一に、物質の世界に関する知識は重要であり、必要なことである。また神はわれらにそれが可能であるように、物質の世界を知る能力を与え賜うた。それ故この能力を最大限に活用すべきである。

第二に、人間がその能力を活用して得た知識は、さらに深い所にある第二の原因によつて与えられるのであるが、究極の原因について解明することは不可能である。この神秘的な力は即天啓（神の啓示）によるものである。以上のことは宇宙の諸事実から知ることができ、またそれが造物主から与えられる勧告（キリスト使徒の教え）である。造物主の勧告こそ彼が人間に喜んで明らかにしようとしている知識の目的である。

第三に、この神の啓示ということは、教育的には帰納的にすゝめられる科学上の発見よりもっと大事なことである。なぜならば神の啓示を知ることが、人間のこの世における人格を決定することとなり、また次の世の永遠の運命を決定することとなるからである。それ故われらが大事にしている宗教の教義や礼拝行事を教えない教育組織は、人間の知恵の中に人間の身体と精神を健全に保持するための原理を充分与えることは不可能である。

以上のような理由からキングズ・カレッジにおいてわれらの願ひは

この聖域内に科学と文学の殿堂を建設することである。正しい原則の上に公共の利益と個人の幸福の基礎を培うことである。そして神の栄光をいや増すよう社会の最高の利益を得るよう推進することである。^(註18)と結んでいる。

以上のプロムフィールド僧正の見解は、五年前H・J・ローズ博士(第二代学長となつた人)がケンブリッジ大学で述べた意見とびつたり一致する。またローズのかつての友人で後にオラトリオ会員(一六世紀設立されたカトリック教の一修道会)となつたJ・H・ニューマン(一八〇一—九〇、オックスフォード運動の指導者)の主張とそっくりそのままの考え方である。このあとオッター学長は同じような意味の講義をおよそ四時間も続けた。開学式は全般的に快活な気分というようなものではなく、カレッジの将来を暗示するかのよう陰うつなものであつた。

開学式では教会と国家の好ましい関係が推進されるものと期待していたのに、これは期待外れとなつた。教会の結束さえも思わぬ出来事でおどされている。一八二八年までは寄付や寄付申込みがひっきりなしに舞いこんでいたのに、今やびたりととまつた。カレッジは経済的に破産状態のまま、開校することとなつた。

カレッジに許可された校地は最初の予想に反し、その広さもその位置も不満足なもので、開学準備の莫大な出費に評議員会は壊滅しそうになつていた。カレッジの校舎はまだ予定の半分も完成されていないし、さらに完成までにはもつとむづかしい問題に出会いそうである。キングズ・カレッジの創立者たちの胸の中に、一〇月の土曜日の夕方この湿っぽい陰気そうな夕方帰宅を急ぎながら、創立の喜びよりも

前途への不安が去来したにちがいない。だが彼等は勇敢で決心が固く、信念にみち、正面から困難にぶつつかかり、不幸を成功に導き得る、力量の持ち主たちであつた。

講義開始

発令された教授たちは講義を開始するよう要請された。それは公開講義である。ここに六人の教授の公開講義要項がある。

一〇月一日(火) (1)バーネット教授、植物学について、(2)ダニエル教授、化学

一〇月一七日(月) (3)アンステイス教授、古典特に古代史、古代哲学
十一月一日 (4)パーク教授、法学、(5)バーネー博士、ドイツ文学、

(6)ヴェトアラ博士、フランス文学。
カレッジの所定の四課程の講義も開講された。

(1)一般課程 神学(学長)、古典語(アンステイス教授)、数学(ホール教授)、英文学と歴史

(2)医学課程 解剖学、植物学、化学、医薬物質

(3)選択課程 法律、経済学、地質学、動物学、博物学、現代外国語(フランス語ドイツ語等)

以上のように開始され、第一講義年度に登録された学生数は七六四名となつた。

(1)高等部 正課学生六六、臨時学生一四九

(2)医学部 正課学生四八、臨時学生三三九

(3)中等部 一六二

高等部学生で一般教育課程を受ける者は次の教育課程を履習する。

午前一〇時、学生は全員カレッジ礼拝堂の礼拝に参加する（一五五分間、一〇・一五―二三・〇〇）、彼等は古典と数学の講義を受ける。ただし、火曜日は英文学、金曜日は歴史学の講義に参加する。月曜日は午後一時、学長の宗教の講義、イギリス国教会の教義と礼拝行事について、金曜日に同じテーマで宗教の試験を実施している。月曜日の午前中、学長がカレッジの礼拝堂で説教をする。正規の学生は全員出席する。ただしその両親又は保護者と、別のイギリス国教会派の教会の礼拝に参加してもよいという許可を、学長からもらっている学生は別である。月曜日から金曜日までの午後の時間は、科学と現代外国語の講義の時間となっているが、これは強制課程ではない。

授業料

一般課程の学生の授業料は、寄付金納入者の指名権保持学生は年間二一ポンド、それ以外の学生は二六ポンド五シリングである。

医学部の課程は普通三年間で、その後は薬剤師協会の規則で可否が決定される（免許は従業員全員の同意が必要である）。その後外科医のローヤル・カレッジで補充の仕上げが必要とされている。

医学課程の授業料は、指名権者は五〇ポンド、それ以外の者は五四ポンド一三シリングであった。^(註19)

キングズ・カレッジ・スクールの発展

この下学年部——大学への入学準備学校の開設は大成功であった。それは中産階級の子弟の必要をみたすことになったからである。ここでは古典と数学だけでなく、現代外国語と自然科学を教えていた。入

学者数は急速に伸び、五年間連続して入学者が増加した。従って教職員を増し、食堂を拡張し、寮を増築した。一八三二年以降五年間の生徒数は、

一八三二年	一五〇名
一八三三年	三一九名
一八三四年	四〇四名
一八三五年	四六一名
一八三六年	四一九名

生徒の月謝と教師の報酬

生徒の月謝は寄付者の指名権のある生徒は年間一五ポンド一五シリング、その外は一八ポンド一五シリングであった。

教師の報酬は一八三二年五月決定された。それによると校長は生徒一人当四ポンド四シリング（最初の一〇〇では一人当一ポンド一シリングを加算する）、第二教師は一人当二ポンド二シリング、第三教師、書写教師、フランス語教師は一人当一ポンド一シリングであった。この報酬規準で生徒四〇四名となると、校長は一八〇〇ポンドを越え、第二教師（教頭）は八五〇ポンドを越える。当時学長は大学の管理に当り、礼拝堂で説教し、神学の講義をし、毎週の試験を実施し、年間報酬は八〇〇ポンドである。その他の教授は最高四〇〇ポンドである。書写教師でも有名教授より収入が多くなる。一八三四年六月、普通の生徒の定員を三五〇名とし、次のように配分することとした。

校長	一〇五〇ポンド
第二助教師	五〇〇
第三	三〇〇

第四　　〃　　二〇〇　　〃

第五　　〃　　一五〇　　〃

三五〇名をこえた場合、生徒一人につき次の比率で加えること、した。二ポンド、一ポンド、一五シリング、一〇シリング、五シリング。日課表は午前九時から午後三時（春と夏は四時まで）までとし、途中レクレーションのための一時間をおく。^{〔注20〕}

高等部の改善

一般課程の正規の学生は、一八三一年から六年まで、六四、一〇九一〇四、一三三、一二〇名となり、臨時の学生は、一八三一―二年三〇六名いたが、一八三五―六年一〇五名となった。一六歳で入学し、中等学校の6年級として勉強し、一八歳又は一九歳で就職し、又は大^{〔注21〕}学にすむ。それ故その数は決して一五〇名をこえないようにし（一八四八年）、一八五四年以後は定員を一〇〇名に限定した。^{〔注21〕}

商学部の新設

一八三五年四月、カレッジ評議員会は商学部の開設を考慮中であるとし、その年の六月計画を次のように発表した。

- (1) キリスト教教授（学長）
- (2) 商業原理と商業実践の教授
- (3) 英文学、現代史
- (4) 現代外国語（フランス語ドイツ語スペイン語イタリア語）

新しい商学教授は一八五五年まで任命されていない。それ故二〇年間中止状態にあったこと、なる。^{〔注22〕}

キングズ・カレッジ「准学士」

キングズ・カレッジ高等部の一般課程で、神学、古典、数学、英語を三学期（三年）間学習し、全課程を終了しても、特別な恩典はなかった。それはオックスフォードやケンブリッジの各カレッジが入学の条件とする学力よりも低いものであった。それはキングズ・カレッジの入学年令一六歳から見ても当然である。（現在イギリスの中等学校修了資格試験の普通試験は、公立中等学校五年級一六歳で受験し、二年後に高等試験を受けている）。^{〔注23〕}

高等部の学力の程度について沿革史を書いたF・J・C・ハインシヨウは、「その当時トーマス・アーノルド（一八二八―四二、ラグビー校長）がラグビー校の六年級に授けていた教育とそっくり同じものであった。それは実業に就く少年にとつては完成教育（普通教育）であるが、オックスフォードやケンブリッジへ行く者のためには古典学級であった。^{〔注24〕}

一八三〇年代、アーノルドがラグビー校の六年級で使用していた教科書は、古典はヴァジル（ローマの詩人）、キケロ（ローマの政治家）、ホーマー（ギリシアの盲目詩人）、デモステネス（ギリシアの雄弁家）、アリストテレスの倫理学等の諸著作。ギリシア語聖書。歴史ではツキディデス（ギリシアの歴史家）、タキツス（ローマの歴史家）、ラッセルの現代ヨーロッパ史等の諸著作。数学はユークリッドのⅢ―Ⅵ、一次と二次方程式、三角法等を古典担当教師が教えていた（数学教師はテート校長の一八四五年はじめて任命している）。^{〔注25〕}その他フランス語を教えていた。^{〔注26〕}

六年級の在学期間

現在イギリスの中等学校の最上級である六年級に平均三年間在学させている。アーノルド時代の正確な資料はない。クラレンドン報告書に収録されているラグビー校六年級生徒名簿によると、一八六一年一月現在、一番生徒は一年一か月在学している。翌年七月卒業するとすれば二年六か月在学することとなる。同様にハロー校の六年級生徒名簿によると（この資料は宮崎女子短大研究紀要第四号、イギリスの教育(7)、ハロースクールの教育に掲載している）、一番生徒は一八六二年七月卒業するとして丁度三年間在学することになる。時代の進歩とともに校長が校長学級（六年級）の教育に努力を集中したことがよくわかる。

さて、キングズ・カレッジの一般課程を満足に終了した者を、そのまま、においてよいのか、この問題を解決するための小委員会が構成され、一八三四年次のように決定された。

三年の課程、即第一年目は中世の四学（神学、古典、数学と英語）、第二、三学年は選択教科の学習を満足すべき成績で通過し、礼拝堂の行事にも参加した学生に「A・K・C」(Associates of King's College)（キングズ・カレッジ准学士）の称号を与える、^(注28) というのである。

医学部経営困難

医学部には二つの大きな悪い条件があった。第一は、この教師がその教育課程をきめかねていたことである。それと薬剤師協会と外科医学校から出されている教育課程への要望に、満足に答えられないことである。第二は、医学生が医学上の実習をする付属病院をもつてい

なかつたことである。特に第二の不利は決定的であつた。

ロンドンにはミドルセックス病院の外に三病院があるが、全部付属医学校をもっている。それ故競争相手となる他の学校の実習生を引受けることには極めて消極的であつた。キングズ・カレッジ医学部教授はこれらの病院のいずれかと関係がある。それ故教授の学内での担当業務や収入の分配上で、いろいろの醜聞が流される。こんなことから医学部は次第に衰えはじめ、一八三二―三三年、七七名いた学生は、三四―五年、四二名となつた。一八三五年五月、評議員会は医学部の支出は一、一〇〇ポンドであつたのに。収入は八二〇ポンド、二八〇ポンドの欠損であつたと発表した。

こんな不遇時代の一八三六年八月、生理学と病理解剖学教授としてトッド博士が任命された。彼はアイルランド系のイギリス人で、既に私立医学校の講義で名声を高め、ウェストミンスター病院でも彼の診療活動は有名であつた。彼は生れながらの開拓者精神の持主で、キングズ・カレッジの問題を次々に解決していった。それには三代にわたる学長の協力も力があつた。

第一に、医学部教授が宗教試験を実施せねばならぬという重荷から解放した。

第二に、この医学部と薬剤師協会との関係をたち切つた。

第三に、医学部に奨学生を設けることで、医学部の教育に活を入れ

た。
最後に、大学の近くに医学生の実習に必要な付属病院を建設した。これは大変な貢献であつた。^(注29)

一八三六年、オッター学長が辞任した。一八三一年から三十七年まで

第1表

学 生 数

1831—37

学 年	学 生					合 計
	高 等 部		医 学 部		下 学 部	
	正 規	臨 時	正 規	臨 時		
1831—32	66	149	48	339 ²	162	764
1832—33	109	196	77	233	319	934
1833—34	104	171	66	175	404	920
1834—35	133	104	42	175	461	915
1835—36	120	105	80	100	419	824
1836—37	118	54	65	108	380	725

注; 1. F. J. C. Hearnshaw: The Centenary History of King's College London 1828—1928, P 125から引用
 2. 1831年医学部、臨時学生 339名の中には新任医学部教授が前の学校からつれてきた学生 222名を含んでいる。

の学生数は第1表の通りである。

五、カレッジの拡張時代

第二代学長H・J・ローズ（一八三六—四三在職）

彼が一八二六年ケンブリッジで行なった説教は、健全な学問と宗教を結びつける運動の口火となった。その結果はキングズ・カレッジの創立にまで発展することとなった。それから七年後、彼のサフオーク（イングランド東部の州）のハドレー教区牧師館に集っていた人たちが、イギリス国教徒の団を結成し、この人たちが「教会の友の会」の中核となった。彼らの思索と労作が後にオックスフォード運動として発展し、その宣伝のために発行した「小冊子」^{トラクト}は一八三三—四一年の間に九〇篇に達した（この小冊子発行のことを「トラクタリアニズム」とよんでいるが、これはオックスフォード運動の別名である）。

一八三六年の春、キングズ・カレッジ学長職が欠員となる数ヶ月前ローズとJ・H・ニューマン（一八〇一—九〇、オックスフォード運動の理論的指導者、後カトリック教に改宗し、英国のカトリック教枢機卿となる）の間に、意見のちがいが表面化した（これは六六冊子によって）。これがローズ、キープル（一七九二—一八六六）、ブュジー（一八〇〇—八一）等がイギリス国教会内にとどまり、ニューマン、ウオド等がローマン・カトリックに改宗するわかれ道となった。彼はこの頃四〇歳をこえたばかりであったが、イギリス国教会内の傑出した指導者の一人であった。そのま、成長すれば彼は必ずや教会の最高位にまで昇るべき人であった。しかし彼は健康に恵まれなかった。

彼は一七九五年、父が牧師補をしていたサセックスに生れた。父はその後アックフィールド教会に移った。この主任牧師はドレイリー博士（キングズ・カレッジ創立の主唱者）であった。一八一三年ケンブリッジ大学にすゝみ、一八一七年総長賞を受けて卒業し、翌年聖職位を受けると直ちに、ドレイリー博士のもとで牧師補となった。三年後ハルシャム教会の代理牧師^{ツイカー}となった。しかし病気が重くなったので、三年後長期療養のためドイツに赴いた。ドイツではいわゆるドイツ神学を研究し、その成果は帰国後「ドイツにおけるプロテスタント国家について」の著書となった（一八二五年発行）。この本の中で彼はルーテル派教会にみまぎっている理性主義を公然と非難している——理性主義というのは、彼は教会の信条がないこと、イギリス国教会の祈とう書のようなものがないこと、をさしている。この本はイギリスとドイツに大きな影響を与えた。

一八三〇年、ホーレー大僧正は彼の健康を考慮してサフォークのハドレー教区主任牧師に任命した。三年後エセックス（イングランド南東部）に移った。その後彼はグラム（北東部）僧正に説得され、新設大学の神学教授に任命された。しかし北国の空気は健康によくない。彼はぜんそくに犯された。一八三四年南に帰り、大僧正付牧師に任命された。翌年サウスウォーク（ロンドン南部の自治区）の聖トーマス教会の終身牧師補に任命された。こゝで彼は健康をとりもどし、大活躍をはじめた。教会雑誌の発行、百科辞典の編集等に当り、またカンタベリー集団の指導者として活動した（この集団はカトリック教会派と非国教会派の中間を行くイギリス国教会派牧師の研究集団）。

一八三六年八月、オッター学長はチチェスター僧正に任命され、ロ

ーズがキングズ・カレッジ学長に任命された。^(注30)

新「勅許状」

ユニバーシティ・カレッジと学位試験委員会

新学長が直面した最大の問題は、ロンドンに学位を与える大学を設立するという、一八三六年一月二八日付の、新勅許状の発行についてである。その要点は大学の教育課程の上で「神学」の地位をどこにおくかということである。この問題が一八二八年ゴッワー・ストリートの功利主義者たち（彼等は神学を無視した）に不利となっていた。そこでこの問題については一応一八三五年五月の段階まで引戻して考えてみたい。

ゴッワー・ストリートにある「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の管理者たちは、一八三〇年勅許状の発行を申請したが失敗したので、一八三三年改革された、議会議院が優勢な議院に再度申請した。一八三五年枢密院で先に申請された勅許状の条件が具体的に審議されている最中に、キングズ・カレッジの責任者から内務省に対し、学位を与える権限はキングズ・カレッジを含めた首都の教育施設に与えるよう申し入れがあった。ゴッワー・ストリートの「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」に対しても、二つのカレッジが「学位試験の実施と学位の授与」のために連合し、首都における唯一の「学位授与カレッジ」となることの申し入れに対し、一八三五年八月賛成の意向を示してきつた。その結果次の協定が成立した。

第一に、ゴッワー・ストリートの施設はその名称「ユニバーシティ

・オブ・ロンドン」を返上し、少し下の「ユニバーシティ・カレッジ」とすること

第二に、ゴッワー・ストリートのカレッジは、教育課程の編成や試験の実施権を、新たにつくるべき新しい外的権威にゆずりわたすこと

第三に、新たに設立される「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」は従来の大学とちがひ、学位試験だけを管理する団体とすること。この試験はユニバーシティ・カレッジとキングズ・カレッジの学生だけではなく、イギリス国民の他の教育団体から派遣される学生の試験も管理する団体とする。

勅許状発行さる

ゴッワー・ストリートの管理委員会は政府の意向に同意を示した。そこで一八三六年十一月、二つの勅許状が発行された。

第一は、ゴッワー・ストリートの施設をロンドン、「ユニバーシティ・カレッジ」の名称のもとに、法人団体たることを許可する勅許状である。

第二は、「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」という新しい名称の、学位授与権をもつ「学位試験委員会」の設置を許可する勅許状である。この新しい試験団体たる大学は、王によって指名された評議員で構成する評議員会である。その委員は第一級の人物のみである。総長はパーリントン伯（後の第七デヴォンシア侯）、副総長J・W・ラボック、その他貴族三名、僧正四名、ラグビー校のアーノルド校長、G・ゴート（一七九四―一八七一、ギリシア史の大家）等である。しかしアーノルド校長は宗教試験を実施するか否かでもめ、後に委員を辞退した。ロンドン大学は一八三八年、最初の詳細な教授細目を発行した。大

学は三種の学位のみを許可する。即文学、法学と医学である。文学と法学の第一は学士号で、この学位は二回の試験即大学入試許可試験と大学の最終期末試験の二つである。第一の試験は年一回一〇月実施し、料金は二ポンド、不合格者には返済する。試験は三教科のみ、必修である。(1)数学(算術・代数・幾何学)、(2)化学と博物学、(3)古典(ギリシア語ギリシア史ラテン語ローマ史等)。

第二次学位試験は第一次試験通過後二年経過して後、受験することができる。学士号をとるためには次の試験に満足すべき成績をとる必要がある。(1)数学と博物学、(2)化学、生理学、動物学、(3)古典、(4)論理学と道徳哲学、試験は年一回五月に実施し、料金は一〇ポンド、不合格者には返済する。

学士(B・A)号をとって一年後に修士(M・A)を受けることができる。同じきまはり法学士、医学士にもいえる。医学士、医学修士については実習証明書並びに病院勤務証明書は欠ぐことができない。(注3)

キングズ・カレッジ病院

一八三九年四月、聖クレメント・デーン教区にある貧民収容所がこの夏閉鎖されること、この収容所はそう多くの費用をかけずに付属病院に模様がえが可能であることがわかった。評議員会は六〇年間年三〇〇ポンドで借りうけることとした。調査の結果二五〇病床の病院とすることが可能である。

評議員会は一八三九年五月、三〇ギニー(三一ポンド一〇シリングに当る)の寄付者は病院の終身委員とすること、年間三ギニー寄付者はその期間委員とすることを決定し、寄付募集することを決定した。

病院は管理委員に選ばれた委員会で運営される。一二ヶ月以内に一万ポンド近く集まり、年々の寄付金は五四〇ポンドが約束された。建物の改造費三、七七六ポンド、その他の調度品は凡そ三、一〇〇ポンドと見積もられた。この付属病院は一八四〇年四月、僅か一二〇病床をもつて開業することとなった。最初の一二ヶ月間、委員会の報告によると入院患者は一、一〇九名、外来患者は六、五七六名となっていた。^(注)

工学部開設

一八三〇—四〇年代は国をあげて工学技術開発の時代であった。マカダム道路（スコットランドの技師マカダム『一七五六一—一八三六』が発明した碎石をしきつめた道路）、新しい運河、新しい工場、新しい建築物、新しい炭山、鉱山、新しい鉄道等、至るところ建設の時代であった。訓練された機械屋、測量技師、建築家、デザイナー等は引張りだこなのに、その養成所は不足していた。

ローズ学長は時代の要求を観察していた。一八三八年四月、彼は評議員会に土木工学科の開設準備中である旨報告し、五月になるとその詳細について発表した。教育課程は次のようである。(1)数学（ホール教授）、(2)機械学（モズレー教授）、(3)化学（ダニエル教授）、(4)地質学（フィリップ教授）、(5)電気学（ホイートストーン教授）、(6)機械製図（交渉中）、(7)測量学（交渉中）

工学部の課程は二年から三年か、り、月謝は一学期一〇ポンド一〇シリングであった。一八三八年一〇月、三一名の学生を迎えて開設された。学生は翌年五〇名、一八四〇年五八名となった。

第2表

学 生 数

1836—43

学 年	カ レ ッ ジ				中 等 部	合 計
	正 規			臨 時		
	一 般	医 学	工 学			
1836—37	118	65	—	162	380	725
1837—38	116	60	—	143	346	665
1838—39	120	65	31	137	396	749
1839—40	112	81	50	102	432	777
1840—41	87	88	58	116	462	811
1841—42	84	93	53	112	471	813
1842—43	106	115	37	113	497	868
1843—44	130	131	33	80	465	839

注: Ibid: P 163

準備学級の開設

次に土木工学科に進みたい者のために、準備学級が開かれることになった。こゝでは数学、機械、製図等の予備教育を施した後、土木工学科にすゝませた。(注22)

次に一八三六―四四年の学生数を示す。

六、カレッジの繁栄時代

第四代学長W・ジェルフ(一八四三―六八在職)

第三代学長J・ロンズデール(一八三九―四三在職)はリチファイル僧正に任命され、後任にオックスフォードのクライスト・チャーチの僧会議員であるR・W・ジェルフが任命された。

彼はグロスターの騎士の家に生れ、イートン・カレッジからオックスフォードのクライスト・チャーチに学び、一八二一年コープルストン学長(キングズ・カレッジ創立の協力者、後のランダフ僧正)時代、オリエル・カレッジの特別研究員(学生の個人指導に当る)に選ばれた。この時代オリエル・カレッジには時代を代表する人物やその後継者がひしめいていた。

ホエートリ(一七八七―一八六三)、一八一一年オリエル・カレッジの特別研究員、一八三二年ダブリン大僧正となる)

ホーキングズ(後のオリエル学長)

トーマス・アーノルド(一七九五―一八四二)、一八二八―四二、ラグビー校長)

ニューマン(一八〇一―九〇、オックスフォード運動の指導者、後

のカトリック教会枢機卿となる)

キーブル(一七九二―一八六六、オックスフォード運動の中心人物の一人)等である。

彼は一八二六年オックスフォードを去り、ドイツに渡った。その目的はイギリス、ハノーバー王朝の法定推定相続人たるジョージ王子の個人指導教師となるためである。彼はドイツ語、ドイツ神学を研究し、一三年後の一八三九年伯爵令嬢を夫人として帰国し、クライスト・チャーチの僧会議員となった。一八四三年、第四代学長となり、ジェルフ時代を迎える。(注24)

神学部の開設

このカレッジは宗教が無視されている理由で僧正たちが創立し管理していながら、一八四六年までまだ神学部がなかった。オックスフォードやケンブリッジの各カレッジは、本来教会に奉仕する牧師養成所として設立された施設であった。

キングズ・カレッジでは一六歳の生徒を受入れ、彼等に二年又は三年間古典、文学、自然科学に関する学問を教え、その上で学位を得たい者をオックスフォード又はケンブリッジに送っていた。所が事情は変っていた(一八三八―四八年間に起つた急進主義の政治運動であるチャーティズムを指している)。この政治運動では議会毎年開会、普通選挙の実施、代議士資格としての財産制限撤廃など六項目からなる人民憲章People's Charterの通過を議会にせまっていた。オックスフォードやケンブリッジの学費負担不能の学生もいる。それらの救済のため一八四六年以降聖職位授与の課程を設けることとなり、直ちに委員会が発足した。一

八四六年一月次のように報告された。

(1) 神学部を創設し、開講は一八四六年のイースター（復活祭、三月二一日又はそれ以後の満月の次の第一日曜日）とする。

(2) 入学を許可される者はキングズ・カレッジの准学士、オックスフォード又はケンブリッジの学生で、僧正に推薦され、学長が許可した者。

(3) 入学許可に当つては、三九ヶ条（一六世紀制定されたイギリス国教会の教義、聖職位につく者はこれに同意せねばならぬ）に署名すること。

(4) 教育課程、略。

学生の入学金四ポンド一三シリング、月謝は一学期間一二ポンド一ニシリングとする。証明書は学長が発行する。剰与金が出たら積立て神学生の寮を建設するものとする。貧乏な学生のために月謝無料の座席を確保するよう配慮する。二月一三日評議員会は、二三名の僧正がキングズ・カレッジ学長の証明書づくりの卒業生を受入れることに同意したことの報告を受けた。神学部は一八四六年四月開講した。^(註35)

軍人養成部の開設

神学部の開設はジェルフ学長（一八四四一六八在職）独特の創造物であった。彼は三九ヶ条の解説に全力を払い、神学部の発展に努力した。立派な神学生を育てることによって、イギリス国教会に活を入れ、これによって国家の基礎を固くする、これが彼の真のねらいである。彼は神学部の基礎が確立できると、次に軍事部門の強化に乗りだした。

一八四八年という年は不思議にも事件が多かった。フランスの二月革命、ベルリンの三月革命、ハンガリーの三月革命等が続いた。イギリスではアイルランドの反乱があり、チャーティスト運動はますますはげしくなってきた。

このような時代にサンドハーストの陸軍士官学校のみでは国家の安全上如何にも頼りない。ジェルフ学長はキングズ・カレッジ内に士官候補生養成部を創設して、国家の危機に対処しようと考えた。この部を設けるにしても大部分の教科は現在の教授陣で事足りる。不足しているのは築城学と用兵学の教授のみである。一八四八年一〇月、ジェルフ学長は軍人養成部の開設について評議員会に提案した。評議員会は一月、この計画に賛成した。

軍事教育には次の三部門が必要である。(1) 神学、主として聖書と教義問答について、(2) 一般教養で、歴史、地理、文学、ラテン語、フランス語、ドイツ語、数学、物理学等、(3) 軍事専門教科、戦術、用兵学、築城学、測量学等。

評議員会は早速人選に入り、陸軍砲兵隊のマンリー・デイクソン大佐と、六九連隊のW・ウォーカー大佐の二名を教官に任命した。学生は第一年目二〇名、第二年目一名、第三年目には僅か一〇名となった。予想に反し志願者が少いのは、神学と一般教養に関する学科が多すぎるといふことになり、一八五一年これらの教科を少くし、さらに月謝^(註36)年額一三ギニー（一ギニーは二シリング）を一〇ギニーに減額した。しかし学生数は多くなり、第4表で見られる通り、一八五八―九年度の三名を最後に自然廃部となった。^(註37)一八四三―五三年の各部署学生数は第3表の通りである。

第3表

学 生 数

1843—53

学 年	カ レ ッ ジ					臨 時	中 等 部	合 計
	正 規							
	一 般	医 学	工 学	神 学	軍 人			
1843—44	130	131	33	—	—	80	465	839
1844—45	125	152	30	—	—	71	471	849
1845—46	122	192	54	—	—	85	502	955
1846—47	121	182	71	33	—	94	500	1001
1847—48	156	137	71	55	—	85	460	964
1848—49	132	151	55	66	—	137	466	1007
1849—50	120	159	42	54	20	79	463	937
1850—51	111	196	39	54	11	94	449	954
1851—52	111	199	44	68	10	96	447	975
1852—53	106	199	41	78	13	76	469	982

注: P 202

夜間学部の開設

一般市民の中に新しい時代の教養を身につけたいという要望が高まっていた。事務所や商店に勤める青年、銀行の書記、昼間学校に勤めている無資格教員又は低資格教員等からの要求である。彼等は単に知的慰みを求めているのではない。その課程を満足に終了すれば、最終的に免許状又は学位を獲得できるといふような、適切に組織された教育課程を希望している。

このカレッジの有能な職員カニングム氏が市民のこの新しい要求を掴み、プルンプター教授は夜間無報酬で神学を講義してもよいと申し出た。市民への奉仕と大学の拡張を考へていたジェルフ学長は、一八五四年六月評議員会の中の教育課程委員会に出席し、夜間学部開設について述べた。この計画は多数市民の注意をひきつけるであろう、教授陣は現職者を中心にし、月謝は極力少額にするよう、提案された。実施計画が練られ、一八五五年一〇月、夜間学部が開設された。

教室は一六教科にわたって提供された。一教室は一〇名以上の希望者があればよい。この自由選択制は成功し、暫くすると二一教科にふくれ上った。月謝は極めて低額とした。一〇月から翌年三月までを一学期とし、この期間一教科につき一ギニー半、四教科に出席する者（一週間のうち四日間出席する者）は五ギニー、これらの月謝は昼間行方講義の半額である（一ギニーは二一シリングである）。

最初は夜間学部専任教師はいなかった。しかし学生は増加し、大成功であった。一八五五年一〇月、開設数週間後、ジェルフ学長は学生は一七五名となったと、評議員会に報告した。登録している学生数は旧約聖書五六、新約聖書五二、ギリシア語七、ラテン語三四、フラン

ス語六四、ドイツ語一九、英語三二、歴史一九、数学三七、商業一〇、
 絵画九、化学六（ある者は一教科のみ、しかし二教科、三教科、四教
 科とする者もいる）。

夜間学部の授業は午後七・三〇―九・三〇である。夜間学部開設二
 年後の一八五八―九年度、登録学生数三七八、モーレー氏は英語を教
 え、ステッピング氏は歴史を教えている。共にキングズ・カレッジの
 卒業生である。現在ロンドンのジャーナリスト（新聞の寄稿者）で、
 一週一回講義にきている。モーレー氏は段々教育事業にひかれ、一八
 六五年キングズ・カレッジ夜間学部講師から、ユニバーシティ・カレ
 ッジ文学部教授に迎えられることとなった。この頃（一八六五年）夜
 間学部学生は六五四名となり、二年後には最高の六七四名となった。

このキングズ・カレッジの夜間学部はこの方面の開拓的事業で、一
 九世紀カレッジがなした偉大な教育事業であった。当時この夜間
 学部に関する施設にどんなものがあったか、代表的な施設について少
 し述べることにする。^{〔注38〕}

青年キリスト教協会

この青年キリスト教協会（Young Men's Christian Association）
 の起源は宗教的色彩の強いものであった。一八四四年、ジョージ・ウ
 イリアムズという呉服店の店員が発起したものである。その目的は呉
 服商やその他の仕事に従事している者の集りに礼拝行事をとり入れる
 ことによって、青年の精神状態を改善していこうというのである。

所が、暫くすると協会の魅力を拡大する目的で若い店員たちに、聖
 書を中心に家族内で又は他の人々と一緒に、お祈りをするとか、聖書
 研究教室、或は相互の学習会に発展させようという相談となった。

一八四八年、新しい運営方式によってグresham街に図書館と教室
 が設けられ、こゝに講義室をつくることとなった。一八五〇年報によ
 ると、既に五〇〇名の会員が記録され、その教室にはフランス語、ド
 イツ語、ギリシア語、ヘブライ語、算術、数学、簿記、歴史、論文の
 書き方、小説作法、詩篇詠唱法等があった。その上この協会は冬にな
 ると大規模の連続大講演会を開いていた。^{〔注39〕}

ロンドン機械工業研究所

ジョージ・バーベック（一七七六一―一八四一）は一八三三年、ロ
 ンドンにこの機械工業研究所を創立した。その目的は職人に化学と機械
 の哲学、創造と科学、富の蓄積ということに親しみをもちたせること
 であった。この研究所は後にバーベック・カレッジに発展し、さらに一
 九二〇年にはロンドン大学に移管されたことは既に「イギリスの教育」
 ⑩に述べた通りである。^{〔注40〕}

モーリス氏労働者大学

この労働者大学（Working Men's College）はF・D・モーリス
 （一八〇五―一七二）の指導のもとに集った人々を主として、一八四八
 年結成されたキリスト教社会主義運動の中から生れだたものである。

一八四八年二月のフランス革命、四月のチャーティスト運動（急進
 主義政治運動）は、中産階級と労働者階級の間に大きなみぞがあるこ
 とに気付かせ、何とかしてこの両者の結びつきをはかるべき必要を感
 ぜさせた。

彼等はこの答えを「社会主義」の中に見出した。この社会主義はロ
 バート・オーエン（一七七一―一八五八）流の社会主義（世俗化され
 た社会主義）ではなく、キリスト教の伝統に生きる社会主義、すべて

の人々を眞の人間の地位にまで高める社会主義、すべての階級の人々がより高い精神的理想を追求するような社会主義である。

モーリス（の人物については婦人学部で述べた）はこの頃四三歳で、ロンドンのキングズ・カレッジの文学・歴史と神学の教授であった。彼は一八五三年神学論文集を發行した。所がこれは異端の説と判断され、キングズ・カレッジ教授の席から追放されることとなった（彼の父は新教の一派ユニテリアン派三位一体説を排し唯一の神格を主張しキリストを神としない人たちの団体一の牧師であつたため、モーリスはケンブリッジのトリニティ・カレッジに入学したが学位はもらえなかつた）。しかし彼は一八六六年からその没年までケンブリッジ大学の道徳哲学教授をつとめている。

キリスト教社会主義の賛同者の中にはチャールズ・キングスレー（一八一九―七五、牧師、小説家、詩人）、トーマス・ヒューズ（一八二二―九六、法律家、トムブラウンの学校生活の著者）等がいる。彼等はあらゆる種類の社会事業を開始した。戸別訪問、幼児学校と夜間学校の開設、聖書教室、労働者相互援助協会等の経営である。

一八五三年モーリスがキングズ・カレッジを追放されると、彼を長とする「労働者大学」建設の議が本格化した。（カレッジとは教師と学生が共に会員の一人という意味である）

大学は一八五四年赤いライオン広場の一角に開かれた。入生は読み書きそろばんの初歩を終つた、一六歳以上の者とした。モーリスはこの大学は自主的管理団体でなくてはならぬとした。だが教授の内容と方法は教師自体が決定すべきであるとした。モーリス自身も神学と歴史を教えた。こゝで学ぶ者は筋肉労働者、下級の書記、商店員、低

賃金の下級労働者たちであつた。最も繁昌した教室は言語の教室、英語文法、数学、図工等の教室で、歴史、文学、法律、政治等の教室は希望者が少なかつた。モーリスは一八七二年没した。トーマス・ヒューズは直ちに学長職を継いだ。

この大学は一九世紀の終りには学生が一、〇〇〇名登録されていた。（注4）

学外学生のための准学士試験

成人教育のための施設は、以上のようなのが全国各地に続々設立された。しかしこれらの施設を修了しても特別の資格が与えられることもなかつた。

キングズ・カレッジの夜間学部の講義は、大学の組織的な教育そのまゝで、期間も三年から四年継続された。評議員会は前例はまだないが、夜間学部の学生でも必要な条件をみたすならば、キングズ・カレッジ准学士の証明書でも、カレッジの各種の賞も解放すること、した。新しい規則は一八五八―九年度大学要覧に記されている。キングズ・カレッジ准学士をとるための条件として

- (1) 一年間四課程に出席すること
- (2) 神学講義と礼拝堂行事に出席すること
- (3) 品行方正であること
- (4) 試験でよい成績をとること、同時に優秀賞や証明証をとることも必要である

暫くして学外学生のための「学外学生のための試験制度」ができた。これに対し、従来のは「学内学生」のための試験制度である。従来のカレッジの教育方法は、教師と学生がカレッジ内で寢食を共にしながら、学習をすゝめ、最後に卒業試験に合格した者に学位を与えて

第4表

学 生 数

1853—68

学 年	カ レ ッ ジ							中 等 部	合 計
	正 規						臨 時		
	一 般	医 学	工 学	神 学	軍 人	夜 間			
1852—53	106	199	41	78	13	—	76	469	982
1853—54	105	191	47	76	10	—	85	473	987
1854—55	89 ¹	178	42	71	6	—	91	433	910
1855—56	84	172	58	73	6	322 ²	94	435	1244
1856—57	89	158	57	74	5	184	85	426	1078
1857—58	92	158	65	59	3	164	66	404	1011
1858—59	81	161	51	63	3	378	59	370	1166
1859—60	83	166	66	71	—	549	66	402	1403
1860—61	84	156	86	71	—	648	51	410	1506
1861—62	73	147	83	66	—	618	48	405	1440
1862—63	95	144	74	48	—	578	44	426	1409
1863—64	76	153	71	41	—	639	50	418	1448
1864—65	72	130	84	52	—	661	78	413	1490
1865—66	58	140	86	51	—	654	65	384	1438
1866—67	69	140	88	51	—	674	54	370	1446
1867—68	66	130	88	50	—	630	55	344	1363

注：1. この中には市民奉仕部（短期間経営）の10名を含んでいる。

2. この中には商業の特殊課程 110名を含んでいる。

3. P 271

きた。キングズ・カレッジは通学制である。それ故これらの通学制の学生の外に、他の大学や研究所で勉強した学生を対象にする試験、即「学外学生のための試験制度」が出来上った。^(注43)これらの学生は「学外学生」(External Student)であり、試験を通過した者を「学外学士」(External B.A.)とよんでいる。^(注43)

七、カレッジの転回時代

第五代学長 A・ベアリー（一八六八—八三在職）

ジェルフ学長は一八六八年辞任した。丁度七〇歳であった。学長選考委員会はこの機会に学長の権限に変更を加えた。学長志願者に配布された募集要項によると、学長は礼拝堂付牧師たること、学生あてに講義すること、各種委員会を定期的に招集し主催すること、報酬は基本給五〇〇ポンドと、学生一人当り一ポンドの加算があること、六五歳となれば引退すること等である。

このときの応募者は一〇名あった。書類選考で四名に絞られ、次に面接が実施された。その上で投票され、次の二名が残された。

(1) J・ハンナー、グレンナルモンド（スコットランド）のトリニテイ・カレッジ（有名な私立中等学校）校長

(2) A・ベアリー、チェルトナム・カレッジ（一八四一年創立された私立中等学校）校長

最後の投票でベアリー博士が過半数を獲得し、学長となった。

A・ベアリーは一八二六年建築家の次男として生れ、一八四二年キングズ・カレッジに入学した。成績は極めて優秀で、翌年七つの賞を

とった。その後ケンブリッジ大学にすゝみ、優秀賞を受けて卒業し、トリニティ・カレッジ特別研究員として残った。その後彼はリーズ・グラマー・スクール校長（一八五四―六二在職）、チェルトナム・カレッジ校長（一八六二―六八在職）となり、この六年間で彼は下学校学校を新設し、体育館をつくり、新しい寮を五つも完成するという、大業績を残してきた。

ベアリーは学長に就任すると、多くの専門家を教授として迎え、教授の陣容を強化した。彼は「広教会派」(イギリス国教派内自由に広く抱擁する立場をとっている)に属し、多数の友人がいた。彼は非国教徒にまで広くキングズ・カレッジ准学士を与えるようにし、また婦人のためのカレッジも創立した。^(注4)

大学財政の確立

一八六九年一二月の評議員会で秘書官は驚くべき報告をした。二月六日の朝、食堂のテームズ河に面したテラスが陥没し、調理室が破壊された。その遠因は堤防の下側でやっている鉄道の工事ではないかと。その修理費は凡そ一、七〇〇ポンドである。その他カレッジが当面する必要経費は総額凡そ三〇、〇〇〇ポンドに達している。この金額を市民に訴える資料として、

- 1、一八二九年以降の欠損一五、〇〇〇ポンド
 - 2、科学実験室の建設費と設備費
 - 3、食堂の修理費
 - 4、病院の建設費
- 募金は一八七〇年春からはじめ、評議員会の各委員からは三、七〇

〇ポンドが直ちに届けられた。しかし市民からの反応はにぶかった。一八七二年五月、カンタベリー大僧正が主催する協議会がもたれ、この年八、一四五ポンドが集った。しかし一八七六年までに漸く一一、〇〇〇ポンドに達しただけであった。学生数は一八六七年三四四名が一八七九年六三一名となっていた。

この間ロンドンの同業組合が無関心でいたのではない。一二の大同業組合はその共有する財産(総額千五百万ポンド)と見積もられている。からの収入を嚴重に調査していた。それからの収入は毎年学校、カレッジ、その他の福祉事業に配分されていた。

同業組合のうち「織物職工組合」^(クロス・ウーカールズ)は一八七四年、特別奨学資金(年五〇ポンド支給)を設定し、さらに二件(一八七八年と一八八〇年)各二五ポンドを加えた。その上彼等は工学部に穴打ち機械(価格七〇ポンド)と材料試験器(価格二〇〇ポンド)を寄付した。「服地商組合」^(ドレッシング・マシナリー)は一八七九年価格は五〇〇ポンドの冶金学実験室を提供した。

豊かな同業組合からの寄付で大学はどうにか運営ができるようになった。また公費の補助も受けることができるようになった。しかし公費を受けるとそれだけ会計検査等で公的制約を受けること、なる。^(注5)

夜間学部の充実

ベアリー学長は自然科学面の充実、医学部の充実と病院の病床の増設、一般文学と科学の充実に努力した。さらに昼間働き夜学ぶ人たちのために、夜間学部の充実に努力し、自らも夜間学部の神学講義を担当した。

彼は夜間学部長にレーヴィ教授を任命し、教育課程を次の四群に再

編成した。

- (1) 法律に関する教科
- (2) 行政事務に関する教科
- (3) 商業に関する教科
- (4) 美術工芸に関する教科

このように夜間学部は発展し、学生数は一八九一七〇年度五六一名に達した。その後の一三年間に次に述べる八つの新しい部門が夜間学部に加えられた。そのため学生数は従来の者の外に、毎年一四〇〇名以上の者が加えられることとなった。新設された講座については次の二点が指摘された。(1) その中の幾つかはあまりにも初歩的で学問的でない、それ故「特別講座」の愛称が与えられた。(2) 従来女人禁制とされていた大学内に婦人を迎え入れたことである。これは実に重大な変化である。

1、ギルバート氏銀行講座

ギルバート氏（ロンドン、ウエストミンスター頭取）は一八七二年銀行債券一、二五〇ポンドを遺贈した。その目的は銀行業務について毎年講座を開くことである。評議員会はこの提案をうけ毎年一月から六月までの間、銀行業務に関する六課目の講義を夜間開くこととした。月謝は無料である。この年の参加者三〇〇名、すぐ満員となり、最終試験を自発的に受けた者が五〇名もいた。

2、国内行政事務部

書記養成講座で一八七五―六年一七二名在学していた。

3、金属木材加工工場

一八七五―五年夜間ワークショップ（金属木材加工）教室を設け、三

〇名入学した。織物職工組合はこの教室の講義を充実させる目的で、金属加工と木材加工の優秀者に優秀賞を提供した。一八八〇年材料試験機（時価二〇〇ポンド）を寄付した。

4、ロンドン大学試験

一八七六年までに夜間学部の学生でロンドン大学試験の準備をしている者が、年報（成績表）の中で特別の記述をしてもらいたい者が増した（教育を受けた理論や実践について指導された教授の証明書である）。

5、大学開放講座

一八七六年、「大学開放講座のためのロンドン協会」が発足した。これはキングズ・カレッジの夜間学部と同じ性質のものである。このためか夜間部の学生は一八八三年三八四名に減少している（第5表）。

6、公開講座

社会問題又は政治問題を中心とする講座。

7、実用美術講座

一八七九年実用美術の夜間部教室が開かれた。工学部のグレニー教授が指導に当り、初年度三〇名の学生が集った。

8、行政事務婦人学級

一八八一年、評議員会は婦人を大学の校舎内に入れるかどうか、この決定をせまらるゝこととなった。それは政府が郵便局でその業務に当る婦人を試験の上採用することとなり、その養成のための学級を大学でもってほしいと要求してきたからである。評議員会は討議の上、行政事務婦人学級を設けることとした。^(注46)

婦人学部の新設

女子高等教育の開拓者たち

キングズ・カレッジに婦人学部が新設されるのは一八八〇年、即創立五〇年祭の記念事業としてである。この件についてベアリー学長の努力を述べる前に、キングズ・カレッジが創立以来婦人の高等教育にいろいろの形で深く関係した経緯と、婦人の高等教育の発達そのものについて概要を述べることにする。

キングズ・カレッジは創立以来婦人の教育に重大関心をもっていた。一八四八年創立されたクイーンズ・カレッジ、一八四九年創立されたベッドフォード・カレッジとも関係が深く、キングズ・カレッジの教師が両カレッジの講師として講義していた。中でもさきに述べたF・D・モリス（一八〇五―七二）はクイーンズ・カレッジの創立に深く関係していた。こゝでイギリスの女子高等教育の進展について概観しておきたい。

女子の中等・高等教育に最も早く関心をよせた団体は、一八二九年ロンドンで結成された「女家庭教師相互援助協会」である。しかし女家庭教師は是非救済すべき地位にいなかったため、その効果を發揮することはなかった。この会は一八四三年「女家庭教師慈善協会」と改名し、こゝで二名の男性の援助を受け、積極的に活動をはじめた。その一人はD・レイングである。彼は教育事業に関心をもつ牧師さんである。彼は聖パンクラス（ロンドン中央北部の自治区）の代理牧師で、彼の家はこの協会の集会場となっていた。彼は社会的・教育的な諸問題に関心をもち、その解決に没頭していた。もう一人はF・D・モリス（後出）である。^(注47)

クイーンズ・カレッジ

「女家庭教師慈善協会」は一八四四年四月、この協会の支持者である政治家、僧正、貴族社会に属する有名人四七名を招き、ロンドン・タバーン（ホテル）で昼食会を開いた。座長はケンブリッジ公アドルフ・フレデリック（一七七四―一八五〇）で、特別招待客はチャールズ・ディッケンズ（一八一二―七〇）、小説家、ピックウイック・パー（一八三七―七〇）であった。彼はまだ三二歳であったが、もう彼の名声を高める小説を発表していた。彼は今までも慈善事業団体の会合に招待されたが一度も出席したことはなかった。今回は喜んで出席していた。

当時婦人の地位は極めて低かった。働かねばならぬ婦人も多かったのに、社会的に認められる身分もなかった。ただ結婚することだけが婦人の唯一の職業であった。このような時代に女家庭教師慈善協会は婦人の地位向上のため女子中等教育の充実、女子大学の設立、女子の職業開拓に努力した。協会は活動の根拠地としてハーレー街に、一七〇〇ポンドを投じ一軒の家を購入した。こゝに女家庭教師たちはその氏名を登録し、各家庭に差向けるための「婦人委員会」を結成し、活動のセンターとした。年老いた女家庭教師たちのためには養老院を設立する計画をすゝめ、これは一八四八年セント州内に実現した。

一八四七年七月、女子高等教育に関心をもつ、キングズ・カレッジの九名の教授が会合をもち、この会を直ちに「教育委員会」と命名し、九月、ハーレー街の事務所隣の家屋敷と賃借契約を結んだ。一〇月、キングズ・カレッジの図書館で教育委員会を開き、この会で「クイーンズ・カレッジ」を設立することを正式に決定した。クイーンの名稱

はビクトリア女王（一八三七—一九〇一在位）による（クイーンズ・カレッジは翌一八四八年開学し、学生の第一号サラ・デイコン・ウツドマン嬢が登学したのは五月一日の月曜日であった。このカレッジの開学に当り中心となつたのは、F・D・モーリスである。次にモーリスについて述べる。^(注48)

F・D・モーリス（一八〇五—一七二）

彼は一八〇五年ブリストルの近くに生れた。姉四人、妹三人いた。父はユニタリアン派（新教の一派、三位一体説を排し、唯一の神格を主張し、キリストを神としない人たちの団体）の牧師であつた。彼は主として父のもとで教育を受け、一八二三年ケンブリッジにすゝんだ。彼は休暇で帰宅すると三人の妹たちにギリシア語を教え、イリアッド（ギリシアの詩人、ホーマーの叙事詩）や新約聖書を読ませた。ケンブリッジでは討論協会に属し、土曜日の夜は討論会を開いていた。彼の友人にはJ・スターリング（一八〇六—一四四、文人）、R・トレンチ（一八〇七—一八六、大僧正、詩人）等がいた。これらの友人は後のクイーンズ・カレッジの支持者であつた。

モーリスは一八二六年ケンブリッジを去つたが、学位はもらえなかつた。彼は市民法の試験では優秀賞をもらつていた（学位をもらえなかつたのは父がユニテリアン派に属していたからである。学位を受けるためには正式にイギリス国教会派に改宗せねばならない）。その後ロンドンに出て新聞雑誌の寄稿家となり、次第に教育事業に関心を持ち、スイスの教育者ペスタロッチ（一七四六—一八二七）の事業と著作に興味を持ちはじめた。ロンドンでも友人たちと討論協会を組織

していた。この会員の中にJ・S・ミル（一八〇六—一七三、哲学者、経済学者）がいた。

この頃父が失敗し、子どもたち全員仕事をもつことゝなつた。長女エリザベスはグラッドストーン（一八〇九—一九八、一八六八—一九四の間四回首相となる）の妹の家庭教師となり、メアリーは家庭内で小さい学校を開き、次のプリシラはブリクストンの学校で教師となつた。メアリーは最も意欲的で、C・メーヨー博士とその妹が経営している学校（北サリー州のチームにある）へ、教育方法の勉強に行った。

メーヨーは一八一九年、スイスのイフェルテンのペスタロッチの学校を訪れ、帰国後上流の人々の子どもを集めペスタロッチ流の、直観を主とする学校を開いていた。最初エプソムに開校したが、しばらくしてチームの町に移し、こゝで一八四六年没する迄教えていた^(注49)。メアリーはメーヨーの学校について、モーリスに詳細に報告していたにちがいない。

モーリスはさらに勉強するため今回はオックスフォードに行き、ここで神学について学び、次にイギリス国教会に改宗した。二年後聖職位を受けた。彼はしばらく田舎で牧師補をつとめ、その後ロンドンに出て、ガイ・ホスピタルの礼拝堂付牧師となつた。一八三八年アンナ・バートンと結婚した。（七年間の結婚生活は幸福であつた）。この年「キリストの王国」を発表した。

一八四〇年、キングズ・カレッジの英文学と歴史の教授に任命され、六年後に神学教授となつた。同時にリンカーン法学院（イギリスの裁判官、弁護士を養成する学院）の礼拝堂付牧師に任命された。一八四三年キングズ・カレッジの学長に推薦されたが、これはことわつた。

クイーンズ・カレッジの講師は一八四八年一月発表された。モーリスは学長となるようす、められたが、固辞した。教育委員会の委員長として努力した。講義はイースター（復活祭）後の学期からはじめられた。^(注30)

一八四八年

さて、クイーンズ・カレッジが創立された一八四八年はどんな年だったのか。この年は革命の年であった。国民主義、自由主義、立憲主義、社会主義という言葉が日常語となった年であった。海峡の向う側ではこの二月仏王ルイ・フィリップは退位し、共和国たることが宣言された。イギリスのチャーチスト（一八三八―四八、英国に起った急進主義の政治運動）たちは、この事件に刺激され、四月早々チャーチスト大会を計画していた。チャーチスト運動の中核となる人物は労働者大衆である（F・D・モリスがキリスト教社会主義を唱え、また労働者大学の創設者であったことは既に述べた通りである）。^(注31)

ベッドフォード・カレッジ（一八四九年創立）

創立者レイド夫人（旧名エリザベス・スターチ）は一七八九年ロンドンに生れた。父は洗礼派牧師の子としてワイト島に生れ、二五歳の頃ロンドンにきた。彼はユニタリアン（新教の一派、三位一体説を排し、キリストを神としない人たちの団体、イギリス国教会からは異端視されている）運動に参加していた。エリザベスは一八二一年、エジンバラ出身の医師レイドの後妻となった。レイドはエジンバラ大学医学部の出身で、ロンドンで開業し、神経病の専門医となっていた。宗教は「非国教徒派」に属していた。従ってエリザベスもその一員とな

った。レイドは一三か月後に死亡した。彼女は社会改良家として活動し、宿願の女子カレッジを、ロンドンのベッドフォード街に創立した。^(注32) さて、開学第一年度の学生数（一八四九年二月）は六八名で、予想外に少なかった。六八名のうち四二名は一週間のうち一教科だけの出席者で、しかも成人婦人であった。残りの者は一五名が二教科、八名が三教科、三名のみが四教科をとっていた。^(注33) この学生数は次のように増加している。

一〇〇名を越した年	一八七六年
二〇〇名	一九〇二年
三〇〇名	一九一〇年
六八〇名	一九三二年（最高） ^(注34)
五七〇名	一九三七年

このように、学生数が三〇〇名以上となるのに凡そ六〇年か、つている。これをその頃創立された男子校と比較してみる。

シティ・オブ・ロンドン・スクール

この学校はロンドン市役所事務局長ジョン・カーペンターが、一四四二年遺贈した財産をもとにし、凡そ四〇〇年後の一八三七年創立された男子中等学校である。この年の二月、開校と同時に二〇〇名入学し、三月には満員の四九五名となっている。月謝は年九ポンド（当時ロンドン市内のマーチャント・テーラーズ・スクールは一〇ポンド、ロンドンから遠い田舎のラグビー校一六ポンド五シリング）で、月謝無料の奨学生は八名いた。大学に派遣する特別奨学資金は、個人や同業組合の寄付二八件、金額年間一、〇三〇ポンド余（一人当年三六ポ

ンド余)に達していた。月謝が少いのは学校財産収入が多いので、不足分を月謝で補う方法をとっている(この学校財産収入は一八六二年二、五〇〇ポンド余)^(注55)。

その理由は二つあると思われる。

第一は、レイド夫人の信仰がユニテリアン派に属していることで、三位一体を信ずるイギリス国教会派の人々からは異端視されている。イギリスの宗教改革は、エドワード六世時代から、イギリス国教会派の信仰を深め、それを広く宣伝することに努力が集中されていた(この点については、小著「イギリスの学校教育」第二章、一〇の二、イギリスの宗教改革、一六八一―一九二頁参照されたい)。

第二は、父母負担となる月謝の金額である。女子カレッジに入学を希望する者は、職業をもつ父母即牧師、法廷弁護士、事務弁護士(訴訟事務を取扱う下級弁護士)、医師、外科医、陸海軍の将校のお嬢さん達である。クイーンズ・カレッジ及びベッドフォード・カレッジの父母負担を、一八六八年の学校調査委員会の報告書について調べてみると、正規の課業の月謝は年間二二ポンドから二八ポンドである。この外別の教科を受ければ別に授業料を支払うことになっている。これらの新しい学校は別に学校財産収入がないので、全部父母負担とせざるを得ないのである。^(注56)

その他の女子高等教育機関

オックスフォード

オックスフォードの女子高等教育への要求は、一八六六年までさかのぼることができる。この年教授の奥さんや妹さん達が大学の講義を聞くために、教室に出席したり、婦人のための特別学級を設ける許可

を受けている。

一八七三年、女子カレッジ創立のための委員会が組織された。これは一八七八年「オックスフォード女子高等教育推進委員会」と改称し、翌一八七九年一〇月、次の二カレッジが創立された。

(1) レデイ・マーガレット・ホール

(2) ソマービル・ホール

その後創立されたのは次の通りである。

(3) セント・ヒューズ・カレッジ(一八八六年)

(4) セント・ヒルダズ・カレッジ(一八九三年)

(5) セント・アンズ・カレッジ(一九五二年)^(注57)

ケンブリッジ

(1) ガートン・カレッジ(一八七三年創立)

ケンブリッジにおいてはバーバラ・レイ・スミス(一八二七―一九一)が、女子のためガートン・カレッジを創立している。バーバラはノーフォークに生れ、若くして博愛家や社会事業家の中で有名になっていた。一八五七年フランスの医師と結婚した。一八六六年エミリー・デービス嬢の協力を得て、婦人のための大学教育拡張計画をすすめた。これがガートン・カレッジとなった。^(注58) 第二の女子カレッジは

(2) ニューアム・カレッジ(一八七三年創立)

ベアリー学長の努力

ベアリー学長は女子高等教育に理解が深かった。彼はチェルトナム・カレッジ校長(一八六二―六八在職)時代、チェルトナム・女子カ

レッジ（一八五四年創立）の経営に関係していた。

彼はキングズ・カレッジ学長就任後、一八七一年キングズ・カレッジ後援の「婦人学級」を、リチモンド（ロンドンの西、サリー州の北、ツイケナム（ミドルセックス、リチモンドの西）に実験的に開いていた。これは大学拡張運動のはしりである。この二つの町に特に無学者が多いというのではない。主なる講師がこの町の近くに住んでいただけのことである。

ロンドンにおける「婦人学級」の具体的な運動は、一八七五年ケンジントン（ロンドン西部の自治区）地区の代表委員会から、キングズ・カレッジ評議員会に正式に開設の要求があった。そこで検討のため委員会が指名された。ケンジントン地区婦人の教養を高めるための講座を、キングズ・カレッジの教授陣が、この大学内において、又は学外において、開設することの可否について検討することがその使命である。しかしその記録は何も残っていない。

それから二年半後の一八七七年一月、ベアリー学長、ウォア教授ケンジントンの代理牧師マクラーク（後のリチモンド僧正、その後ヨーク大僧正となる）と、地域婦人代表による、婦人学級開設要求が評議員会宛提出された。学長は婦人学級で実施できる講義（神学、現代外国語、古典、地理、科学の一部）の一覧表を提出した。講義はケンジントン教会の付属室で実施するが、化学と物理は実験室と用具が揃っている大学の教室を使用させてほしいという希望が添えてある。そこで学長は評議員会に次の二点を質問した。

(1)この計画をキングズ・カレッジの学長と教授名で発表することに同意してもらえるかどうか。

(2)化学と物理の講義のために、土曜日の午前十一時から午後二時までの間、当カレッジの化学と物理学教室の使用を許可してもらえるかどうか。

評議員会は第一の申出は許可したが、第二の件、即「婦人が大学の構内に入る」ことは許可しなかった。

一八七八年二月、学長と教授達はケンジントン教会で協議会をもち翌月から神学その他の文学と科学の講義を開始することを決定した。

この試みは大成功であった。出席者は予想以上に多く、年間を通じ五〇〇名以上であった。翌年になると一軒の家を借りうけ、これを校舎として使用すること、した。

一八八〇年三月、デラモット教授は土曜日の午前中、キングズ・カレッジの教室を、婦人学級の美術講義のために貸してほしいと申し入れた。この件については永く討論され、遂に一年間を限り許可されることになり、使用後詳細な報告書を提出するよう求められた。これが大学の女人禁制打破第一号となった。翌年になると科学の講義もキングズ・カレッジ内で実施するようになった。

創立五〇周年記念事業

キングズ・カレッジ婦人学部

婦人学級の学生が一八八〇年からキングズ・カレッジの教室で学習しはじめたことから考え、ベアリー学長はケンジントンの婦人学級とキングズ・カレッジの間の垣は取除かれたと判断した。

一八八〇年一月、学長は評議員会に、キングズ・カレッジの婦人学級講座が大成功であったので、ケンジントんに女子高等教育のための永久的施設を設けたい、名称は「キングズ・カレッジ・フォア・ウ

「イメン」とする、キングズ・カレッジ学長は職務上新カレッジの評議員会の議長となり、評議員会への教師の推薦権を持ち、評議員の三分の一はキングズ・カレッジの職員をあてること、したい、と報告した。

評議員会は慎重に協議した。翌年は創立五〇年に当る。創立五〇周年記念事業として、キングズ・カレッジの重要な一部となる婦人学部を開設すること、した。しかしいろいろと問題点があるので、一八八一年一月、小委員会を任命した。女性のための高等教育は如何にあるべきか、敷地をどこに求めるか（男子のカレッジとの関係がある）。キングズ・カレッジの勅許状は評議員会が婦人のための高等教育を提供する権限を認めているのかどうか、またストランド（現在のキングズ・カレッジの本拠地）以外の土地に、校舎を建設する権限があるのかどうか、検討する問題が多い。

小委員会は二月次のように報告した。

1、現在のキングズ・カレッジの管理方式で、女子高等教育を推進できるのであれば賛成する。

2、評議員会に法律上の権限が授与され、適当な資金が与えられるならば、拡張計画に賛成する。

この結論は一八八一年二月の拡大評議員会に報告された。

評議員会ではあらゆる角度から検討され、次の二条件がみだされるならば、婦人学部を建設することが望ましい。条件の第一は、適当な校舎と設備・備品のために二万五千ポンドを用意すること。第二は、必要な法律上の権限を得ること（勅許状の改訂を示す）。

以上のようにしてケンジントンにキングズ・カレッジの婦人学部を建設することが、一八八一年創立五〇周年記念事業と確定した。

直ちにカンタベリー大僧正A・C・テート博士（一八一―一八二、ラグビー校長一八四二―一八四八、ロンドン僧正一八五六年、一八六八年以後大僧正）司会のもとに特別資金募集計画が協議された。七月のキングズ・カレッジの卒業式には皇太子夫妻も参加され、婦人学部の創立に賛成された。（勅許状の改訂手続きは別項を参照されたい）。この方の許可は一八八二年五月国王からも裁可された。

建設費の寄付募集は評議員、学長、職員から二、二五〇ポンド集ったが、しかし二年後漸く六、〇〇〇ポンドであった。そこで予定を変更して、ケンジントン街の売りにでた邸宅を購入し、模様替えした。こゝにキングズ・カレッジ婦人学部が開校されること、なつた。^(注59)

勅許状の改訂（一八八二年）

ベアリー学長は財政問題に悩みながら、各学部の充実をはかり、さらに市民のための夜間学部、婦人の高等教育のための婦人学級を新設した。しかし婦人をカレッジに入学させる例はイギリスにまだかつてなかつた。

カレッジはもともとコレジエイト・チャーチ（僧会組織教会）の略で、教会の中の一つである。現在一流の中等学校であるイートン・カレッジ（一四四〇年創立、管理委員会は聖職位をもつ一名の僧会員で構成していた）も、本来イートン教区の教区教会であつて、この教会に学校と養老院が付設されていたことは、既に紹介した通りである（養老院は一四六八年はじまつたばら戦争で財産収入減となり廃止され、管理委員会は一八六八年のパブリック・スクール教育法の実施で全面的に改組され、世俗人の委員で構成され、任務も学校経営に一本

化され、教区教会としての任務から解放された^(注6)。イートン・カレッジ内の本来の職員、生徒、使用人は全員男子である。勅許状の使用人の項の最後に「すべて使用人は男子でなくてはならぬ、但し洗濯女を除く」としている^(注6)。

ベアリー学長の婦人学部の新設計画、即男子の学寮から三哩の距離のある場所に婦人学部を建設する計画は、既に得ている勅許状を一部改める必要がある。そこで評議員会はこの機会にその他の必要事項も改訂する計画をたて、小委員会を任命した。委員会は一八八一年六月次のように報告した。

改訂及び追加事項として、(1)株主について、(2)特別研究員について(3)終身委員について、(4)評議員の推薦について、(5)キングズ・カレッジは婦人の教育を実施してよいか、実施できるとすればその場所はロンドン内のどこでもよいか、以上のような条項であるが、最大の目的は第五項目について明瞭な確答を得ることである。

評議員会は以上のことを一八八一年七月議会で請願した。議会は無事通過し、国王の裁可を得たのは一八八二年五月であった。この件に関する費用は一切で四二三ポンド一九シリング八ペンスであった。

新勅許状では先に述べたように、希望はかなえられた。特記すべき点が二つある。

第一は、キングズ・カレッジに婦人のためのカレッジを経営することを許可する、その場所はソマーセット・ハウス(キングズ・カレッジの現在の本拠地)を中心とする、半径一五哩以内であればどこでもよい。

第二に、この機会にキリスト教会の検査をもっと緩和してもらいた

いという希望はかなえられなかった。この検査は世俗人の場合は簡単に「あなたはイギリス国教会の会員ですか?」という形式的な、消極的なものである。しかしこの寛大な検査であっても、J・リスター(一八二七一―一九二二、外科医、防毒殺菌外科手術の完成者)がもしクエーカー派(友の会ともいう、一六五〇年G・フォックスが創始したキリスト教の新教の一派、衣服の簡素、言語の単純を重んじ、戦争に反対している)にとどまっている限り、キングズ・カレッジのどの職にもつくことはできない。それ故一八八二年勅許状第二〇条は、前勅許状第二五条そのままである。即、「イギリス国教会派の会員でない者は、職務上の管理委員、或は終身委員、或は評議員会の委員、或は東洋文学又は現代外国教師以外のこの大学内の如何なる地位にも就くことはできない」のである^(注6)。

この勅許状は今後二一年間にわたって実施された(次の改訂は一九〇三年)^(注6)。

学生数の増加

一八六八年から三〇年間の学生数は第5表の通りである。特別講座一八七五年六八七名の聴講生は、二〇年後二、八三二名(第6表)の多数となっている。婦人学部は一八八五年五〇〇名、その後の学生数は第7表の通りである。一八九七年度合計は、四、一八〇名の多数となっていた。

第5表

学 生 数

1868-98

学 年	カ レ ッ ジ							臨時	中等部	合 計
	正 規									
	一 般	医 学	工 学	神 学		夜 間				
				昼 間	夜 間					
1867-68	66	130	88	50	—	630	55	344	1363	
1868-69	52	140	73	49	—	537	47	353	1251	
1869-70	56	138	66	42	—	561	54	385	1302	
1870-71	68	141	57	46	—	519	45	439	1315	
1871-72	68	154	55	41	—	484	61	456	1319	
1872-73	64	150	58	33	—	563	45	521	1434	
1873-74	51	161	59	32	—	488	50	558	1399	
1874-75	51	151	66	34	—	514	81	544	1441	
1875-76	47	135	70	24	—	533	38	553	1400	
1876-77	38	127	90	39	6	534	58	541	1433	
1877-78	43	121	89	52	13	493	59	606	1476	
1878-79	45	160	78	56	15	487	70	575	1486	
1879-80	39	185	65	58	16	477	58	631	1529	
1880-81	45	210	53	61	18	479	81	611	1558	
1881-82	42	215	69	66	8	430	113	612	1555	
1882-83	41	206	91	60	9	424	142	561	1534	
1883-84	39	223	103	55	14	384	114	572	1504	
1883-84	39	223	103	55	14	384	114	572	1504	
1884-85	31	213	119	70	12	509	87	538	1579	
1885-86	25	215	109	64	12	450	66	432	1373	
1886-87	29	221	81	53	10	471	90	349	1304	
1887-88	26	230	72	55	17	368	80	294	1142	
1888-89	22	220	70	53	21	329	89	251	1055	
1889-90	26	205	75	49	19	312	66	249	1001	
1890-91	50	220	105	47	14	286	120	274	1116	
1891-92	70	220	107	40	16	280	136	236	1105	
1892-93	60	205	107	43	19	502	109	234	1279	
	A ¹ S ²									
1893-94	59	10	200	93	62	19	460	95	1240	
1894-95	59	3	200	81	63	11	473	112	1201	
1895-96	49	15	176	69	68	6	482	159	1230	
1896-97	56	15	153	66	63	5	337	176	1049	
1897-98	58	9	132	61	81	11	360	300	1212	

注: P 335, P 395 から引用

第6表

特 別 講 座

1883—98

学 年	市 民 部		工 芸 部	実 業 美 術	ギルバート 講 座	合 計
	男 子	女 子				
1875—76	172	—	30	—	485 ¹	687
1876—77	300	—	38	—	432	770
1877—78	350	—	35	—	660 ²	1045
1878—79	400	—	25	—	410	835
1879—80	464	—	32	31	454	981
1880—81	500	—	22	25	275	822
1881—82	677	105	22	25	230	1059
1882—83	866	178	38	10	372	1464
1883—84	799	192	53	15	390	1449
1883—84	799	192	68 ¹	—	390	1449
1884—85	704	236	42	—	475	1457
1885—86	768	268	32	—	301	1369
1886—87	664	306	38	—	296	1304
1887—88	624	412	31	—	550	1617
1888—89	487	332	37	—	730	1586
1889—90	544	304	29	—	800	1677
1890—91	615	341	68	—	900	1924
1891—92	781	342	73	—	900	2096
1892—93	1042	386	115	—	1100	2643
1893—94	1216	299	— ²	—	1150	2665
1894—95	1341	228	—	—	1100	2669
1895—96	1475	157	—	—	1200	2832
1896—97	1533	124	—	—	1200	2857
1897—98	1402	134	—	—	1000	2536

注； 1. ギルバート講座は1871—2年開始されたが、1875—6年以前の資料はない。最初の頃は300名をこえていたといわれている。

2. 工芸部1883年の68名の中には実業美術部の15名が入っている。

3. 工芸部の1893年以後は夜間学部へ合併されている。

4. P 335, P 396から引用

第7表

婦 人 学 部

学 年	学 生 数	学 年	学 生 数
1885—86	500	1892—93	430
1886—87	450	1893—94	384
1887—88	480	1894—95	392
1888—89	488	1895—96	392
1889—90	450	1896—97	350
1890—91	468	1897—98	429
1891—92	426		

注； P 396

1. F. J. C. Hearnshaw: *The Centenary History of King's College, London, 1828—1928, 1929*, p. 25 以下 Hearnshaw と略す
2. *Encyclopaedia Britannica*, 10
3. *Ibid*: 12
4. *Ibid*: 23
5. *Ibid*: 3
6. Hearnshaw: p. 28
7. *Ibid*: p. 32
8. *Ibid*: pp. 37—8
9. *Ibid*: p. 39
10. 大野真弓: *イギリス史*, p. 81
11. Hearnshaw: pp. 40—5
12. *Ibid*: p. 46
13. 池田良三: *イギリスの学校教育 (ぎょうせい発行)*, p. 181 友の会 (クエーカー教派) 参照
14. Hearnshaw: pp. 70—2
15. *Ibid*: pp. 74—82
16. *Ibid*: p. 83 注1
17. *Ibid*: pp. 83—92
18. *Ibid*: pp. 94—5
19. *Ibid*: pp. 97—101
20. *Ibid*: pp. 101—4
21. *Ibid*: p. 104
22. *Ibid*: p. 111
23. *イギリスの学校教育*: pp. 236—7
24. Hearnshaw: p. 100
25. 池田良三: *イギリス教育の伝統と未来 (ぎょうせい発行)*, p. 68
26. J. J. Findlay: *Arnold of Rugby, 1914*, p. 211
27. 宮崎女子短大研究紀要第4号, p. 49 *イギリスの学校教育, 6 年上級生徒の実態*, p. 134
28. Hearnshaw: pp. 111—2
29. *Ibid*: pp. 113—7
30. *Ibid*: pp. 127—130
31. *Ibid*: pp. 131—7
32. *Ibid*: pp. 142—6
33. *Ibid*: p. 146
34. *Ibid*: pp. 165—8
35. *Ibid*: pp. 170—6
36. *Ibid*: pp. 176—8
37. *Ibid*: p. 271
38. *Ibid*: pp. 252—8
39. Thomas Kelly: *A History of Adult Education in Great Britain, 1970*, pp. 126—7
40. 宮崎女子短大研究紀要第6集、*イギリスの教育(0)カレッジの歴史, チョールドスミス・カレッジ*, pp. 18—9
41. *Adult Education*: pp. 183—6
42. Hearnshaw: p. 256
43. *Supplement to Oxford English Dictionary, vol. 1 External*
44. Hearnshaw: pp. 276—8
45. *Ibid*: pp. 282—6
46. *Ibid*: pp. 306—312
47. E. Kaye: *A History of Queen's College, London, 1972*, pp. 11—2
48. *Ibid*: pp. 11—46
49. S. J. Curtis: *History of Education in Great Britain, 1963*, pp. 213—4
50. *Queer's Co*: pp. 20—29
51. *Ibid*: p. 42
52. Margaret J. Tuke: *A History of Bedford College for Women, 1849—1937* 1939, pp. 3—28

53. *Ibid.*: p. 61
 54. *Ibid.*: Chart V
 55. イギリス教育の伝統と未来、シチイ・オア・ロンドン・スクール、pp. 90—107
 56. *Queen's Co*: pp. 58—9
 57. *Handbook to the University of Oxford*, 1963, *Women's Education of Oxford*, pp. 305—313
 58. *Britannica*: 3
 59. *Hearnshaw*: pp. 312—8
 60. イギリス教育の伝統と未来、イートン・カレッジ、pp. 30—46
 61. H. C. Maxwell Lyte: *A History of Eton College*, 1875, p. 497
 62. *Hearnshaw*: p. 331
 63. *Ibid.*: pp. 329—330

あとがき

私がイギリスの教育を調べはじめたのは、平塚益徳先生（現在の国立教育研究所長）のイギリスの教育についてのご報告をお聞きして以後のことである。昭和三三年のことである。その頃からイギリスの教育に関する資料、特に古い歴史をもつ学校の沿革史を中心に集めてきた。それらの沿革史を読みながら、ヨーロッパのきびしい自然と社会の中に生き続けた民族の姿を想い描いてみた。

今回は「イギリスの教育Ⅱ」として、ロンドンのキングズ・カレッジの創立と、創立後凡そ五〇年間の発展の経過について述べた。

一九世紀初頭、急進的な合理主義者たちは、一八二八年ロンドンに「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」を創立した。創立を認可する勅

許状を申請したが、認可されなかった。その理由は新大学が「神の存在を否定している」からだという。当時の聖職者たち（大僧正、僧正等）は、新大学の窮状を見かねその救済の目的もあつて、キングズ・カレッジを創立した。次にさきの新大学を「ユニバーシティ・カレッジ」と改名させ、勅許状を受けること、した。さらにキングズ・カレッジとユニバーシティ・カレッジが協力して、学位授与権を持つ「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」という総合大学の設立に成功した。こゝではイギリス国内の他の研究施設で育つた研究者にも受験資格を与え、学位を授与している。これはすばらしい工夫ではないか。こゝで改めて国家の中で宗教の占める地位について考えさせられる。イギリスにおいて聖職者たちが社会の先頭に立っている姿に敬意を表したい。キングズ・カレッジの学生数は

一八三一年 七六四名

一八八三年 一、五〇四名

全 特別講座 一、四四九名

全 婦人学部 四三〇名

合 計 三、三八三名

創立以来五〇年間の発展は素晴らしい。大学が社会の要求に答えて学部を増設し、社会の将来を見通して運営している様は、充分参考とすべきであると考えられる。

次に著者がイギリスの教育について発表した、著書、論文の一覧表を掲げる。

著 書

1 イギリス教育の伝統と未来

トーマス・アーノルドの教育観と実践

発行所 ぎょうせい 価 二、〇〇〇円

2 イギリスの学校教育

チャールズ・ヴォーソンの改革

発行所 ぎょうせい 価 一、二〇〇円

(東京都中央区銀座七丁目二二番一〇四)

イギリスの教育

発 表 誌

第1集 パブリック・スクール

イギリス教育の伝統と未来 第二章 昭和四二和七月

第2集 エドワード・スクリング

全 四三 四

第3集 無月謝学校の歴史

宮崎女子短大研究紀要 第2号 全 四三 四

第4集 イートン・カレッジ

イギリス教育の伝統と未来 第1章 全 四四 八

第5集 組合立学校の歴史

イギリス教育の伝統と未来 第4章 全 四五 一〇

第6集 ハロー・スクールの教育

未 刊

第7集 ハロー・スクールの教育

宮崎女子短大研究紀要 第3号 全 四七 二

第8集 教育課程の研究

イギリスの学校教育 第1章 全 四七 二

第9集 カレッジの歴史

宮崎女子短大研究紀要 第4号 全 四八 二

第10集 カレッジの歴史

イギリスの学校教育 第2章 全 四八 二

第11集 カレッジの歴史

全 四九 一一

第12集 シュロースベリーの聖メアリー・カレッジ

宮崎女子短大研究紀要 第5号 全 五〇 三

第13集 ゴールドスミス・カレッジ

宮崎女子短大研究紀要 第6号 全 五一 三

第14集 ロンドンのキングズ・カレッジ

宮崎女子短大研究紀要 第7号 全 五二 四

昭和五三年四月一日

宮崎女子短期大学教授

住所 〒880 宮崎市大和町一三九一二

電話 ○九八五二四一一八二六